# 文展十年

# 文展十年

青木小四郎著

美術叢書

第五編

# 美術叢書刊行會賛助員

（いろは順）

伊東忠太
大村西崖
川合玉堂
田島志一
高桑駒吉
中川忠順
黑田清輝
寺崎廣業
木村武山
下村觀山

岩村透
和田萬吉
橫山大觀
高村光雲
中村不折
上田萬年
正木直彦
笹川臨風
三上參次

# 例言

□本書は官設展覽會の代表的作品圖錄と審査員名及び優秀なる作品の目錄とを兼ねたもので、美術愛好者の文展追憶に便せしむるものである。文展十年の說明は極めて大體に亙るもの、且つ出來うる限り理論を避けて、平明簡易なる解說を旨とし、圖錄及び作品目錄を見るの參考に資したるものである。內容に卽しての傾向推移に就ては、著者また說を有するが、他日謂ふべき機會があるであらう。

□寫眞は各部に亙つて出來うる限り代表的作品を選ぶ筈であつたが、寫眞として見てあまりに原物の面影を破るものは之を避けたので、稍不完全の譏を免れがたいが、出品目錄竝に解說と比較して見られたい。

□詳細なる文展年表を附する豫定が時のおくれたために出來ないのは遺

憾とする所であるが、再版に附する日に其の缺を補ひたいと思ふ。

口第十回展覽會の批評は招待日當日の僅か一回の觀覽によつて得た印象を記したに過ぎない。雨の日で光線の加減が惡く、聊か暗中摸索の恨がないでもなかつた。優賞品目錄がまだ發表前で載せ得ないのと、寫眞版を多くすることの出來なかつたのは遺憾だがやむを得ない。之も版を再びするの日に、批評と共に改めたいと思ふ。

# 目次

# 挿畫目次

## 挿畫目次

挿畫目次

挿畫目次

第十回　大正五年

片時雨　川合玉堂

木間の秋 （第一回）

下村観山

南風（第一回）　和田三造

森の奥（第一回）　山本森之助

ゆくへ（彫刻）　毛利教武

水墨山水（第二回）

山岡米華

雪松（第二回）　山本春擧

飼はれたる猿と兎　（第二回）　竹内栖鳳

宿鴉　（同彩）　菊池芳文

油斷（第三回）　尾竹國觀

高嶺の雲 (湯山)　川合玉堂

アレ夕立に（第三回）

竹内栖鳳

宴の暇（第三回）　池田蕉園

落葉（第三回）　菱田春草

溪四題（第三回）

雲の峯　　雨後

寺崎廣業

棟木（第四回）　尾竹竹坡

女歌舞妓（第四圖）

鏑木清方

少將伊衡（其一）（第四回）　高橋廣湖

魔障圖（其ノ四）　下村觀山

孔雀王（第四回）　木村武山

四季山水（其一部）（第四回）

佐久間鐵園

黒き猫（第四回）　菱田春草

ひなた（第四回）

岡田三郎助

讀書（第四回）　山下新太郎

女（第四回）　萩原守衛

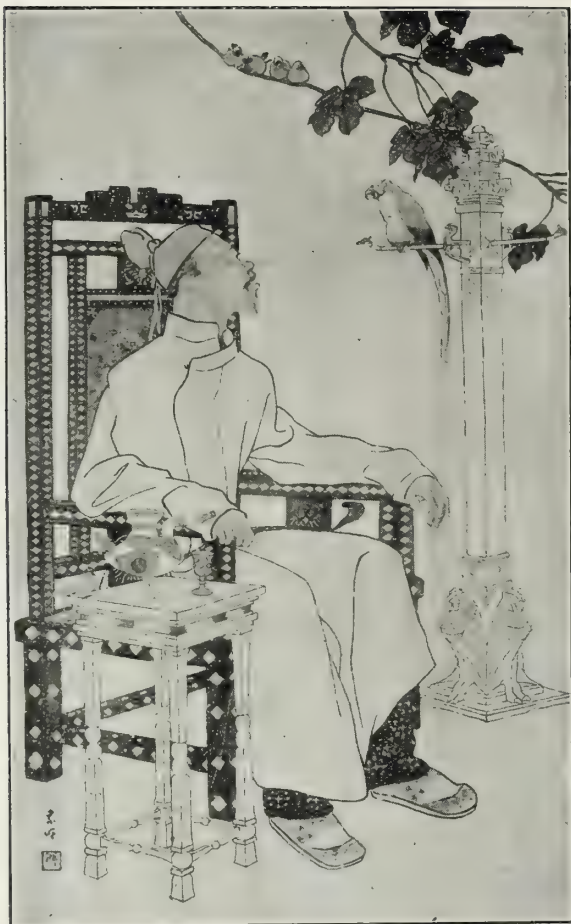
墓守（第四回）　朝倉文夫

水（其一）（第九圖）　尾竹竹坡

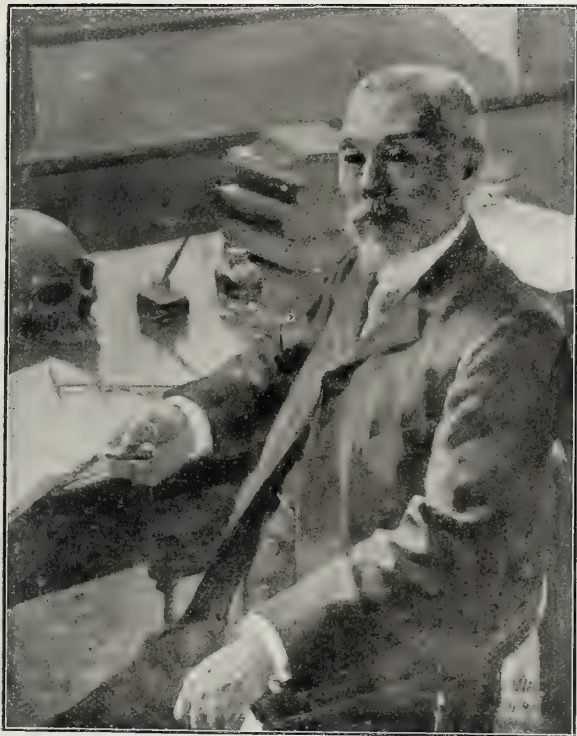
山路（第五回）　横山大観

囀

（第五回）

結城素明

日照ヨ雨（第五回）　北野恒富

浴場にて（第五回）　岡田三郎助

小金井博士の肖像（第五回）　和田英作

百日紅（第五回）　黒田清輝

病婦 (第五回) 柳敬助

幸ある朝（第五回）

藤嶋武二

水郷（第五回）　小杉未醒

専念（第五回）　米原雲海

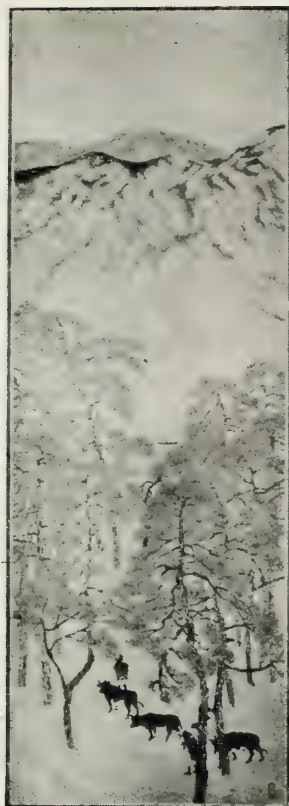
積翠　（同六郎）　高嶋北海

唐崎　　粟津

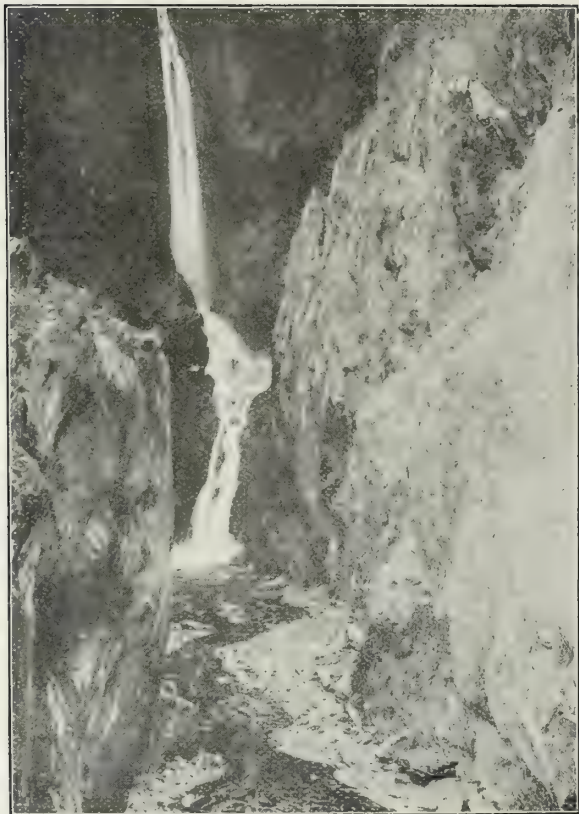
近江八景の内（第六回）

今村紫紅

寒月（其一）（第六回）　木嶋櫻谷

夢殿（第六回）　安田靫彦

瀟湘八景の内 瀟湘夜雨 （第六回）

横山大観

極樂の井（第八回）　小林古徑

瀟湘八景の内 洞庭秋月 (第六回)

寺崎廣業

若王子瀧（第六回）

鹿子木孟郎

獨逸の女（第六回）

石井柏亭

うすれ日　(第六回)　坂本繁二郎

六月の日（其ノ四）　南薫造

無花果畑　（第六圖）　辻永

五月瀟（其二）（第七圖）　池上秀畝

遲日（第七四）　橋本關雪

寒林幽居（第七回）　小室翠雲

雑木山（第七回）　川合玉堂

繪漿蜻蛉（同上影）　　菊池契月

驛路の春　（四七頁）　木嶋櫻谷

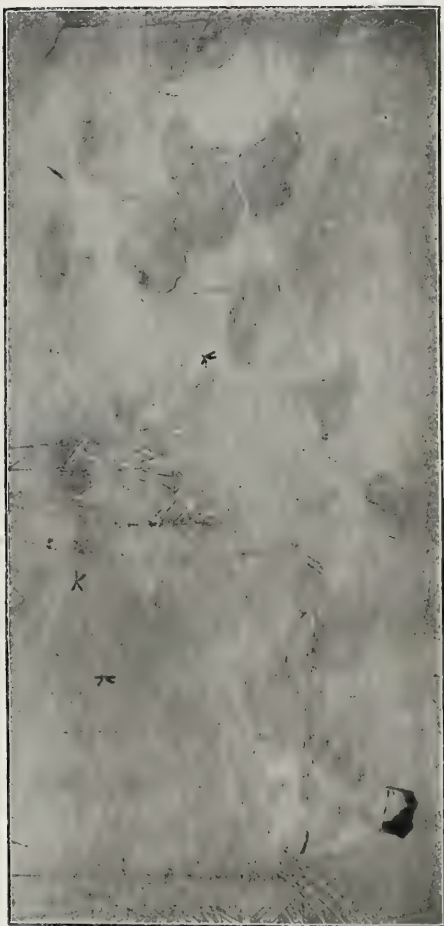
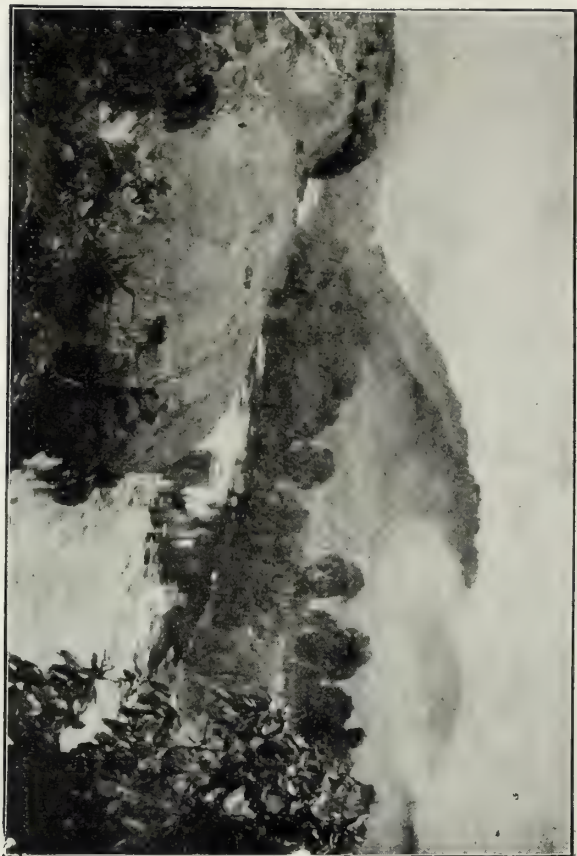
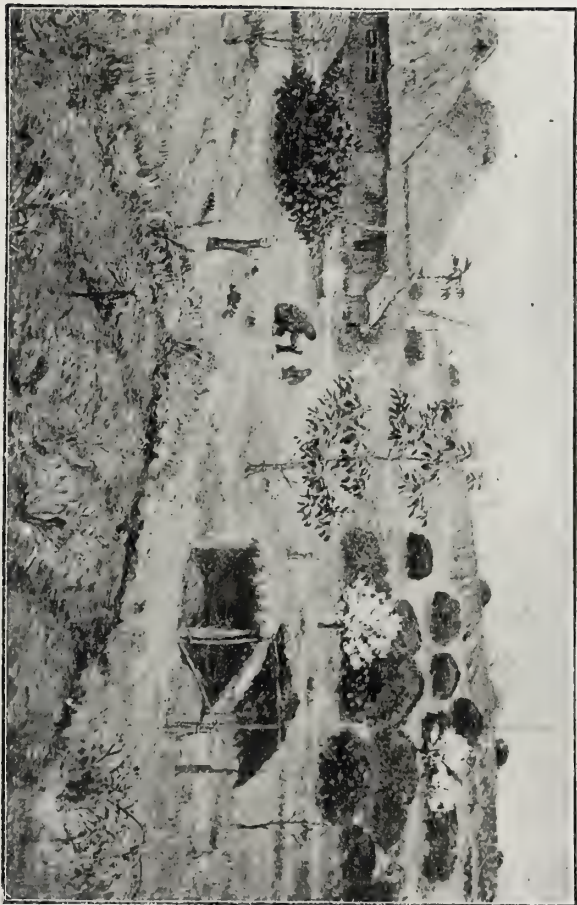
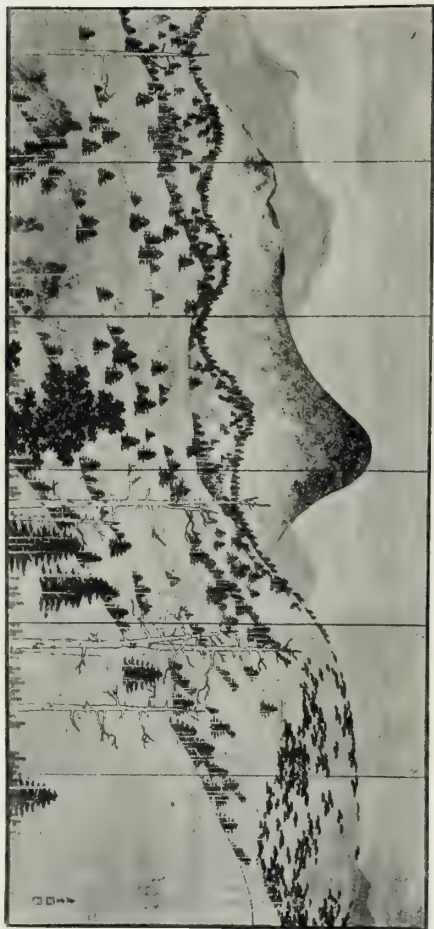
滞船（第七図）　石井柏亭

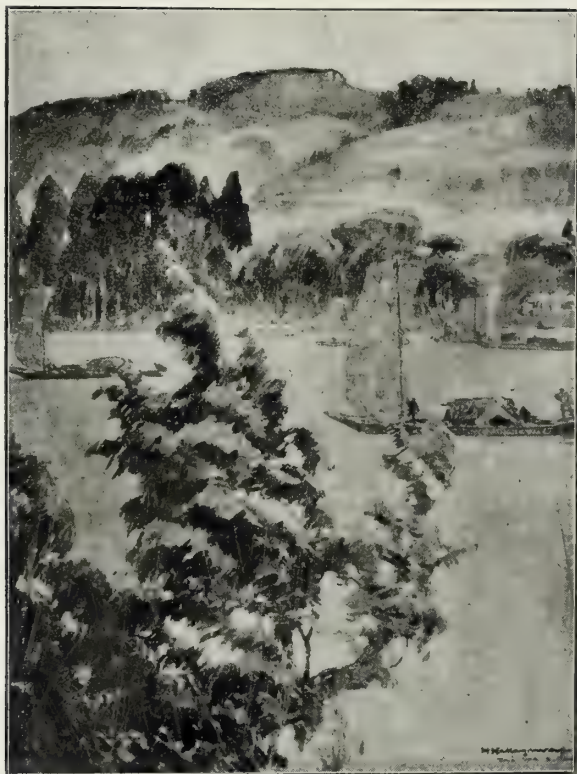
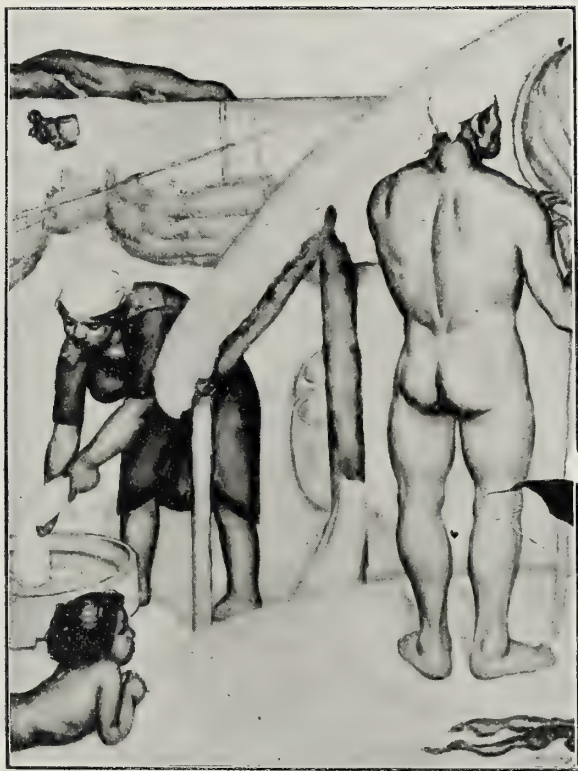
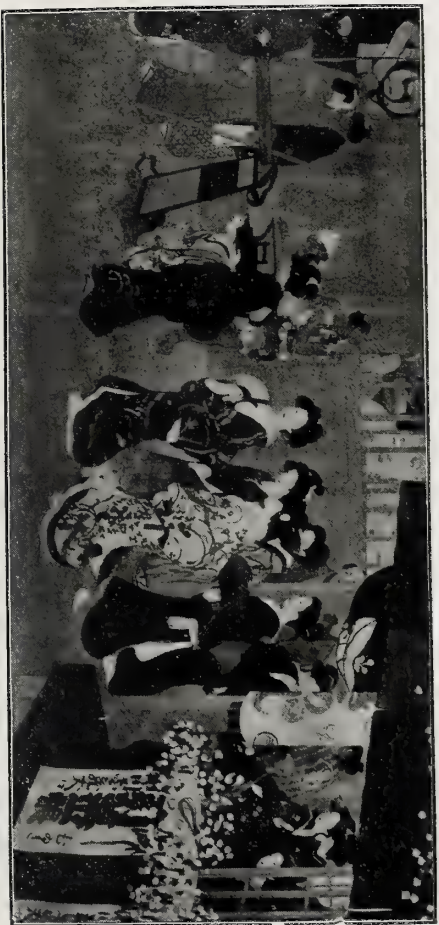
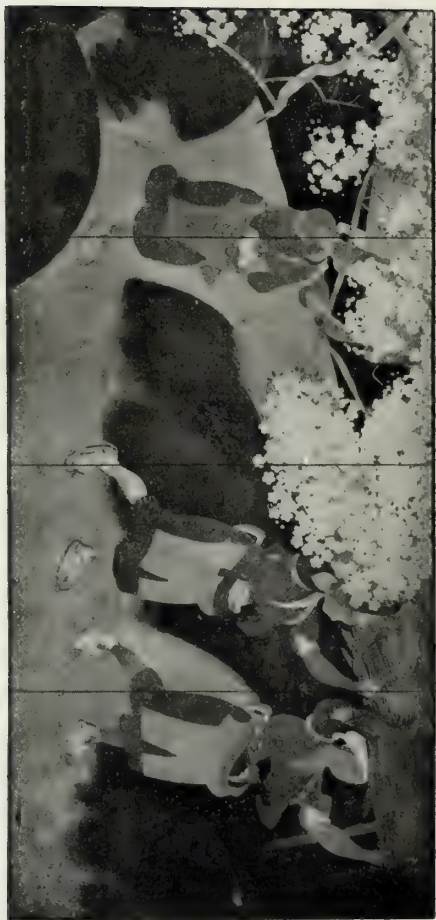
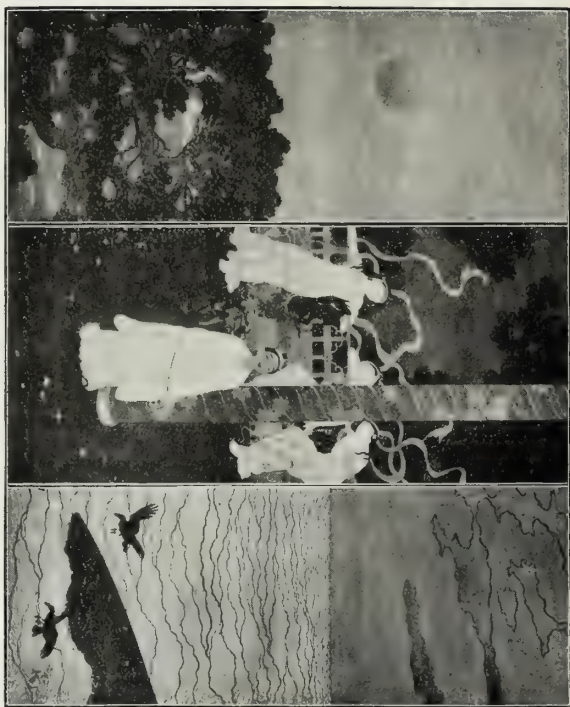
初秋の朝（第七回）　吉田博

春さき（第七圖）　南薫造

墨田川船遊　（五八四）　鏑木清方

舞じたく　(第八圖)　上村松園

高山清秋（圖八四）　寺崎廣業

雨後（第八回）　荒木十畝

最上川（第八回）　中川八郎

砂丘の裏（第八回）　滿谷國四郎

ながれ（四八頁）　中澤弘光

木挽町の今昔　（四九ノ）

池田輝方

大原女（第九回）　土田麥僊

盛夏　　初冬

（第九回）　　山内多門

浦嶋 （第九回） 菊池契月

驟雨　眞晝　夕日

夏　(第九回)　平井楳仙

冬の小川　（四九頁）　三宅克己

入江 (第九回) 柚木久太

イヴ（第九四）

北村四海

文姬辭胡 (其十四) 池上秀畝

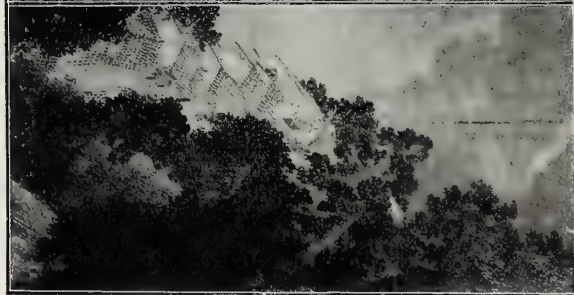
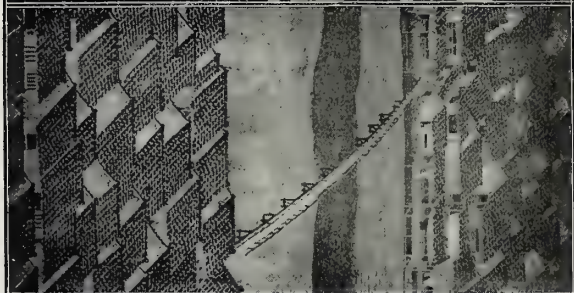
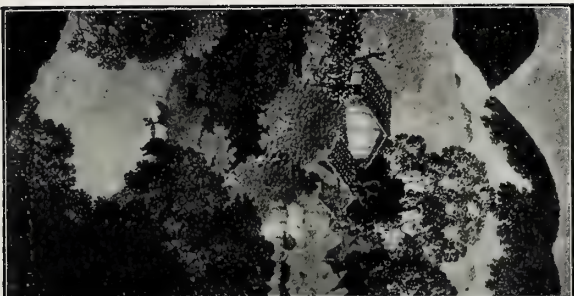
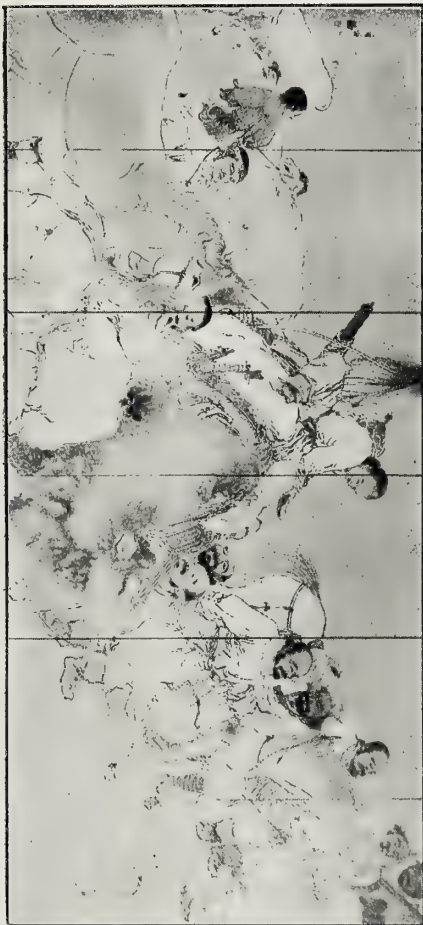
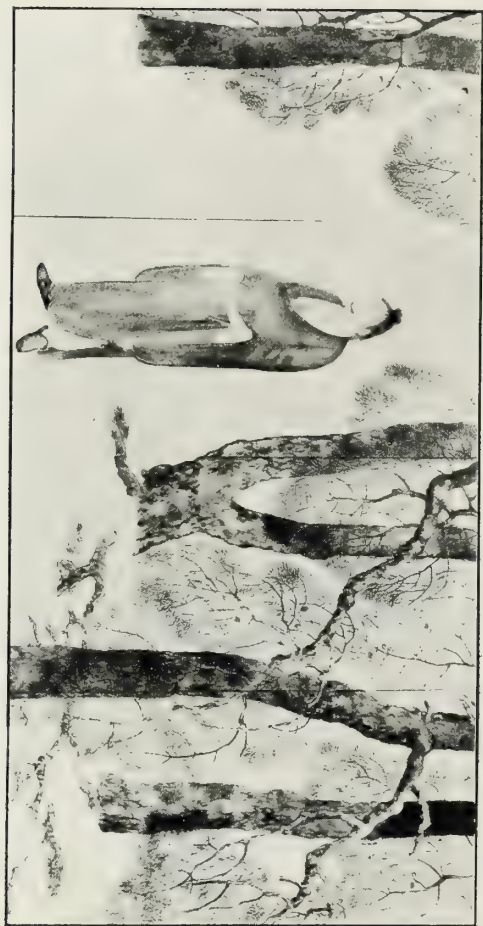
天空海濶 (第十四) 小室翠雲

月　（百十四）　島崎柳塢

清麗（第十回）　寺崎廣業

夕立 (同十易)　池田輝方

寒山拾得（第十四）　橋本關雪

素燒 （第十回） 滿谷國四郎

# 文展十年

青木小四郎編

## 序説

時は移る。人は歩む。十年といふ歳月は開明史的に見ると決して長い期間ではないが、然し、その長からぬ時の間にも刻々に破壊と創造とが行はれてゐる。わが官設展覧會が創設されてから、是に十年になる。この時に際して既往十年間を追想するのも、あながちに無益のことではないであらう。

文展十年。その間の功過如何といふ問題を提供したら、恐らく十人十

色の答を得るであらうが、併し、何人にも、それが如何に下凡なものであるにもせよ、繪畫の趣味を普及させたと云ふことは否むことの出來ない事實であらう。嘗て佛蘭西から歸朝した洋畫家が、巴里では下宿屋の主婦すらサロンの批評を口にするといひ、顧みて日本國民の一般美術思想に及んで歎嗟の聲を漏したと云ふことを聞いたが、今日では東京の下宿屋の女中の大半が文展の噂をするに至つたではないか。文部省の設立の趣旨の主なる一つなる美術思想の普及と云ふ目的のある部分はすでに達せられてゐる。美術思想の普及と共に畫の價格の騰つたことも事實であらう。そしてある點では畫家の奬勵ともなつたであらう。京都の繪が次第に東京のそれに近づいて來たといふことも、大阪に新風俗繪の起らうとして居ることも、文展の結果として擧げてもいいであらう。

吾等は今文展十年の功過に就いて私議せんとするものではない。吾等

は唯文展十年に就いて簡單なる概說を試みれば足る。其の功過の如きは見る人によつて異る。

一口に文展といふが、その中心となり、常に問題を提供するものは、日本畫の部である。日本畫の大體の傾向は如何。極めて大體に就いていへば、今の日本畫には三種の傾向を認めることが出來る。

第一は古格を守つて其の範疇以外に一歩も出ないものである。古倭繪、南畫の系統を追ふものは何れもそれであるが、彼等は其の作物の新味なく内容なく却て俗惡で墮落的なることによつて、自ら其の存在の理由を否定してゐる。南畫の多くは墮落の傾向に屬するものであつて、決して醇雅なものではない。殊に東京には、文晁乃至華山の流風に倣ふものが多いが、大抵は拙劣にして見るに堪へぬもの、古人の上に一歩を出でずして却つて古人より數十步の退步を示すものである。此の部類から吾々

は將來ある何物をも期待してゐないし、期待することも出來ない。
第二は古格を研究して、更に新味を汲み、或は西洋畫の筆意を摸し、從來日本畫中に見るを得なかつた意匠を加へて、研究的態度を持しつゝ、漸次に步武を進むるものである。古畫の研究はその活用に於て初めて意義を持つ、洋畫の傳習もその採取に於て初めて意味がある。彼等が古畫を根柢としてそれに新意を加へて新日本畫を建設せんとする努力は嘉すべきであると共に、必ず將來あるものといふことが出來る。此の種類の中にも自ら急進的のものと漸進的のものとを見ることが出來るが、共に意義のある努力であり、研究である。其の作品には苦悶の迹がある。醇熟の域に達しないものがある。或はあまりに洋臭の多いものがある。併し、此れ卽ち研究的過渡期の特色として、許さるべきであらう。此れを實例に就いて見れば、下村觀山の「木の 間の 秋」、寺崎廣業の「谿四題」、橫

山大觀の「山路」「松並樹」「瀟湘八景」の諸作、菱田春草の「落葉」、尾竹竹坡の「棟木」、「水」今村紫紅の「近江八景」等を初め、其の他之に屬するものは極めて多い。而して其の多くが技巧派ともいふべき京都の畫家から湧かなかつたことも、敢て奇とするに足らぬ。

第三には寫實に基いて裝飾的ならんとする新傾向のものである。之は比較的後に生れた傾向であるが、その難はあまりに純裝飾に近づいて圖案めき、自然の眞諦を忘却して、繪畫としての意味を忘れる點にある。此等のものには、觀山の「木の間の秋」や春草の「落葉」の影響もあるであらうが、それは此等の追從者が、「落葉」や「木の間の秋」に裝飾畫としての外に多大の領域あることに氣がつかぬからである。此の部類のものも、よく導けば新傾向の見るべきものを生ずるかも知れない。

文展の日本畫の傾向は概別して、右の三種とすることが出來る。洋畫

には最近に到るまで、海を隔てた泰西の流行の一波一瀾の影響があまりに著しく、畫家の多くは常に適歸する所を知らない有樣である。洋行がへりが常に文展に於て優賞を占むるが如きは寧ろ稱するに足らぬ。彫刻の趣味は一般に理解されないのみならず、又日本畫や洋畫ほど問題となるまでに達してゐない樣でもある。

今後の文展の行くべき道は如何。これは大なる問題であると共に、また容易に決定し得る問題でもない。吾等は今それに對する意見を陳べる要を見ない。今から去つて、年々の作品の主なるものに就いて、簡單な記述をして、讀者の思ひ出に便せしめよう。文展の內容を主としての推移史の如きを述べて見たいが、今は紙數の許さぬので、他日を期することとする。

## 第一回　明治四十年

第一回の展覽會はそれが初めてのものであるだけに、非常に世の視聽を集めた。畫家の方面に見ても著しく努力の跡が見えた。愈々開會せらるゝに到つて毀譽褒貶の聲の豫期以上に甚しかつたのを見ても、その盛況の度が覗はれる。

日本畫中で最も注目すべき作は蓋し、下村觀山の「木の間の秋」であらう。これは秋の林間を描いたもので、草木の紅葉に色彩の美をつくし、精をあつめ、稍四條派を汲み、光琳を採り、裝飾的傾向に走りつゝ、而も單なる裝飾に陷らずして、寫實に基く自然の眞諦を有する所に其の價値が認められる。推して以て文展第一年の傑作とするに足る作品であつた。觀山の「木の間の秋」は必ずしも、新意を追ふにのみ腐心した作ではな

い。而も、どこかに歩まうとする努力が見える。東京と京都との畫風を比較して、極めて大體に就いて謂へば、東京の畫家は漸く内面的傾向を帶び、京都の畫家は舊に依りて安住せる技巧派たるの觀がある。而して今回の傑作たる竹内栖鳳の「雨霽」の如きも、柳を描き五位鷺を描いて筆致の輕妙と熟達の三昧境に入つたる技巧派の代表作と見ることが出來る。觀山の畫は東京畫壇のために、栖鳳の作は京都畫壇のために、各々氣を吐いたものといふべきである。

寺崎廣業は壯大なる「大佛開眼」を描いて世を驚したが、大作ではあつても、まだ彼の傑作としては推しがたいものであつた。橫山大觀の「二百十日」と「曙色」とは依然として朦朧體の作物であつて、又優れたものであつたが、川合玉堂の「片時雨」は其の穩健な畫風を餘蘊なく示したもので、亦佳作として推すべきであらう。山元春擧の「海月」は壯大な圖樣

を有するものではあるが、やはり技巧のかつたものであつた。審査員中には以上の數氏以外の問題とすべきものはない。

審査員外の作品としては、木島櫻谷の「しぐれ」が群鹿を描いて其の腕を見せたが、その傅彩は京都畫家一流の不愉快なるものであつた。菱田春草の「賢首菩薩」及び安田靫彦の「豐公」は共に個性の表現に努力してゐる作者の苦心の見るべきものがあつた。野田九浦の「辻說法」は其の多數の人物の布置に努力を見る。之に似たものには、町田曲江の「悲報に接したる佛敎の步み」がある。特に表情を描いて稍々成功に近いものであつた。木村武山は廣業の「大佛開眼」に似て、「阿房劫火」を描いたが壯麗といふ意外に多く謂ふべきものを見ない。

美人畫としては、上村松園の「長夜」、島崎柳塢の「西鶴のおなつ」及び榊原蕉園の「もの詣で」などがある。比較的傑出したものとしては松園の

「長夜」を擧ぐべきであらう。

山本梅荘の「秋景山水」は南畫のやゝ見るに足るべきものである。審査員中松本楓湖、小堀鞆音の如きは十年一日の如く武者繪の如きを描く。それかあらぬか、文展には、愚にもつかぬ武者繪風俗畫が多い。

西洋畫中審査員の作では、黒田清輝の「白芙蓉」は清楚高雅、岡田三郎助の「肖像」は妥當温雅で共に佳作ではあるが、特に傑出したものではない。中村不折は「白頭翁」及び「彫刻師」を出して漸く其の趣味のクラシカルにならうとする傾を示す。滿谷國四郎の「購夢」は大作ではあるが、すべての點に於いて研究の餘地を留めた作品である。其の他の審査員には之といふべき程のものも見えなかつた。

和田三造の名は其の傑作「南風」によつて世の視聽を惹いた。「南風」は海上を疾走する漁船の一端に或は坐し、或は立つてる二三の漁夫を描

いたもので。勁健な筆と確實なデッサンとは、多少の缺點を補つてあまりあるものであつた。

山本森之助の「森の奥」はそのそつのない技巧を示したもの。中澤弘光の「夏」、中川八郎の「夏の光」及び吉田博の「新月」の如きはいづれも相當の出來ばえであつた。

橋本邦助の「ともしび」や跡見泰の「夕の岬」も亦記しておくべき作であらう。

彫刻の部は頗る寂寞たるものであつた。數に於て他の部に劣るのみか質に於ても決して優れたものではない。新海竹太郎の「露營の夢」はその平生得意とする所の題材を用ひたもので、稍見るべきもの。米原雲海の木彫の「神來」も相應の作であつた。毛利敎武の「ゆくへ」は「神來」に比して遙にその價値の少ないものであつた。

## 第二回　明治四十一年

第二回に至つて從來見なかつた舊畫の審査員が俄に五名の數を增したことは、世相の反映と見るべきことで、彼等が絕えなんとする古格を繼承してゐても、世俗のそれに對する信仰のまだ失せないことを示すものである。然し、第二回に於ける大事件は之よりも、文展と同時に國畫玉成會が開かれ、下村觀山、橫山大觀を初め舊美術院派に屬する畫家の一切文展に出品しなかつたことである。そして、觀山の「大原御幸」の傑作は之を文展に見ることが出來なかつたし、又安田靫彥の「守屋大連」の如きものも見るを得なかつた。玉成會は一年にして止み、翌年は文展へ復歸したが、美術院派は歷史的に又畫法上に古くから官畫（と云ひ得べくんば）と相容れざるものがある。玉成會はそれを具體化したもので、こ

れやがて後年美術院展覽會の俑を成したるものと見ることが出來る。

玉成會のために振はなかつた文展では京都の畫家が振つてゐた。竹內栖鳳は「飼はれたる猿と兎」を出して、その手法の巧妙を以つて、動物を描き他に比類のない技倆を示した。山元春擧は「雪松圖」の大作を出した。是は彼の得意とする題材であつて、構圖にも難がなく、豪壯で雄勁で傑作となすべきものであつた。二等賞を得た菊地契月の「名士弔喪」は稍々見るべき作であるが、同じき木島櫻谷の「勝乎敗乎」は多數の人物を驅使した點に見るべきもの丶ある以外には傑れたものではなかつた。

寺崎廣業は「月」を出したが、さしたる作ではない。玉堂の「秋山遊鹿」は溫健ではあるが、前年の「片時雨」に及ばぬこと夥しいものである。新審査員の作品に見るべきもの丶多からぬはいふまでもない。

南畫としては小室翠雲の「青山白雲」稍見るべきもの、田中賴璋の「鳴

瀧」小坂芝田の「深遠」もかなりのものではあるが、共に氣韵の不足といふ點に於いて難があるであらう。

川北霞峯の「竹徑春淺」は稍佳作といふべく、都路華香の「諸神歡呼」は尙研究の餘地を止めた作であらう。

上村松園の「月かげ」、島崎柳塢の「おないどし」榊原蕉園の「やよひ」などは大した作ではなかつた。

西洋畫では黑田清輝の「樹かげ」ややおもしろしく、滿谷國四郎の「車夫の家」は構圖の下凡なること驚くべきものがある。岡田三郎助の「萩」は和田英作の「おうな」と共に無難な作として推すべきものであらう。

和田三造は「煒爔」の大作を出して、愈々其の手腕の健實なることを想はしめた。吉田博の「雨後の夕」はまた佳作であつて、雨後の氣分がある程度まで巧に表現されてゐた。中川八郎の「北國の冬」、山本森之助の「曲

浦」、中澤弘光の「雄鹿半島の一角」などは風景畫として、かなり好評を博したものであつた。フランク・べレスフォードの「中條君の肖像」、石橋和訓の「ものおもひ」は共にアカデミックな畫風を持つたものであつた。

橋本邦助の「水のほとり」はやゝ見るに足るもの、水彩畫では三宅克已の「湯ヶ島」にすぐれた技巧と溫雅な自然の見方とがあつた。

彫刻の部では、朝倉文夫の「闇」が場中での佳作であつた。荻原守衛の「文覺」もおもしろいものであつた。北村四海は「春秋」に於いて大理石の使用の巧妙を示した。山崎朝雲の「大葉子」と米原雲海の「寒山子」とには、老練の鑿の跡が覗はれた。新海竹太郎氏の作も目についた。

## 第三回　明治四十二年

第二回の寧ろ甚だしく寂寥であつたのに引きかへて、四十二年の秋は

かなりに、にぎやかであつた。

寺崎廣業は一二回ともに、さして振はなかつたが、「溪四題」を出すに及んで、新日本畫の先驅をなす傑作を示し、文展史上に不朽の名を留めた。彼はこの作をなすに、自然の寫實と古格の傳習とを以てし、極めて大膽なる試をして而もその間に大なる不調和もなく、嘗て日本畫に見たことのない新味を出して風景畫の新樣式を創めた。彼の採取する所は極めて廣く、舊日本畫に更に南畫の意匠を加へ更に古土佐の樣式をまじへ、それに從來見ない筆法をも加へてゐる。此の畫は第五回の大觀の「山路」と共に、一のエポックを作つたものであつた。此等の畫を或は半熟といひ、あるひは西洋臭味の多いのと難ずる徒があるかも知れぬが、それは過渡期の作としてゆるさるべきもの、而も此の作の如きは妥當の出來である。竹內栖鳳はかつて鷺を描き猿と兎とを描いて技巧の爛熟に氣を吐

き、今また「われ夕立に」の作を出して、手法の大膽と色彩の妙を盡し、技巧の點に於ては企及者なきことを示してゐる。この繪には生動の態あると共に、品位もある。栖鳳の名を重からしめる程のものではないが佳作といふべきであらう。横山大觀は「流燈」を描いてその得意の手腕を振ひ、色彩の豐麗と表情の巧妙とを以て、一種獨自の境を開いてゐる。山元春擧の「鹽原の奥」は横卷で變化に乏しいが水の描寫はさすがである。川合玉堂の「高根の霧」は彼一流の作であるが、色彩を主とし規模の小なる恨がある。

審査員外の作品としては、菱田春草の「落葉」を以て白眉とする。此は驚くべき精緻な筆を以て林中の落葉を描き、而も光琳あたりを模し裝飾的傾向を持し、加ふるに毫も自然の眞諦を忘れなかつた點に於て最も見るべきものがある。自然を裝飾的に取扱つたものに一回の觀山の「木の

間の秋」がある。此二者は共に、此の傾向中の傑作として逸することの出來ぬものであらう。

尾竹國觀の「油斷」は中心のない點に於て色彩の照應のない點に於て難はないでもないが、併し、多數の人物を配してさしたる破綻を示さず、國觀やゝ統一もあり、色彩もあまりに下凡ならぬのを取るべきである。國觀の弟竹坡は「茸狩」を出して輕妙なる雅趣を示した。木島櫻谷の「和樂」及び菊池契月の「惡者の童」は共に劣作で人物の形相がわるい。其の傳彩の俗惡で褐色じみたのは更にわるい。審査員菊池芳文の「纎月」にも同じやうなる色彩の上の難がある。

榊原蕉園は「宴の暇」に、鏑木淸方は「鏡」に於て共に艶麗な作風を示したが、あまりに佳い出來ではなかつた。

小室翠雲の「雪中山水」田中賴璋の「霞む春晴るゝ秋」共に可もなく不可

もなく、田邊竹邨の「細雨空濛」の方が寧ろ醇雅であつた。平福百穗の「アイヌ」は單調な空氣を破る磊落な作であつた。

西洋畫。

審査員の多くが肖像畫を揃へたのはむしろ奇妙な現象といふべきである。黒田清輝の「寺尾理學博士」、和田英作の「原法學博士」と「角田市區改正局長」、岡田三郎助の「大隈伯夫人」の類はいづれもそれで、而もいづれも相當な出來であつた。滿谷國四郎の「かぐや姫」は力のはいつた作ではあるが、彼に劇的構圖の完きものを求むることは、求むるものの誤であらう。

中澤弘光の「おもひ出」は大作である。そして浪曼的理想的のものを描いて、これまでの效果を得らるれば、まづ成功にちかいものといふべきであらう。たゞし佛體に尊嚴の氣のないのは殘念である。鹿子木孟郎の

作では、淺間山中の小品が見るべきもの、黒田清輝は肖像以外に「鐵砲百合」を描いて、自然の特殊性を重じ、直截に得た印象をそのまゝに表現してゐる。

吉田博の「千古の雪」は構圖はいゝが、色にすこし窮屈な點がある。山本森之助の「濁らぬ水」は佳作であらう。中川八郎の「瀨戸内海」、跡見泰の「砥石切」はまづ無難である。橋本邦助の「暮あひ」は裝飾的傾向を有する氏としては、得意な題材ではなかつた。

山脇信德の「停車場の朝」は小品で人目につかぬやうなものではあるが、構圖が淸新で、印象の鮮かな作であつた。渡邊ふみの「白がすり」と石井柏亭の「熊野河口」と、正宗得三郞の「白壁」などは今でも思ひ出せる作である。

彫刻の部では、朝倉文夫の「山から來た男」、荻原守衛の「北條虎吉肖像」の二者が共に注目を惹いた。此の二人者は彫刻界に於て最も將來あることを示した。惜しいかな、荻原守衛は早折した。

新海竹太郎の「原人」はその手法を見るべきものである。米原雲海の木彫「宇宙」も佳作といふべきであらう。

## 第四回　明治四十三年

文展なる語は年々弘通し、今や漸く新しき年中行事の主なるものとして見らるゝに到つた。それだけ對世間的ともなつたし、そのために此の會を創設した當事者の目的の一部分も達せられた譯である。併し、又、一方から見ると、その品位を重じ、鑑別を高くせんことを望み、徒に俗眼に投ぜむとするの陋を歎ずる者もあつた。そして此と相關聯し老朽に

して新趣味を理解し得ぬ老大家、或は黨派心乃至は地方的感情に動かされて、弊を他日に殘さむとする先輩に對する非難の聲も起らずにはゐなかつた。何にしても、此等甲の是とする所、乙の非とする所、紛々たる世論の起るのは、畢竟、文展そのものの種々の意味に於ける發展の反響に他ならぬ。そして、公平に考察しても、文展は年々その量に於て進歩を示すのみか、質に於ても向上の迹を示してゐるのである。

第四回も決して寂寞とは謂ひ得ないのみか、日本畫の如きには頗る注目に値するものがある。洋畫稍々振はざるの感ないでもないが、然し、それが退歩を意味する者ではない。彫刻には、又可成り優秀のものを見た。

日本畫に於て最も見るべきものは、之を審査員側にしては、觀山の「魔障圖」であり、廣業の「夏の一日」であり、大觀の「楚水の卷」であり、春擧の「寂寥」であり、春草の「黒い猫」である。是を審査員外にして

は、竹坡の「棟木」があり、契月の「供燈」があり、清方の「女歌舞伎」があり、櫻谷の「かりくら」がある。其の他玉堂の「炊煙」蕉園の「秋のしらべ冬のまどゐ」翠雲の「山海圖」の如きも紋逃の筆を省き得ぬ作品であらう。

觀山の「魔障圖」は、その鳥獸戲卷と百鬼夜行とから得來つた一種の意匠と、その奇警にして而も漫畫的傾向をもつ筆致と、更にこの種の圖樣に最も適合してゐる白描法を用ゐて、優に渾然たる一作をなして居る。屋中に靜坐せる一僧と怪佛、屋根に跳梁跋扈する多くの魔物には、一々變化と活動の趣があつて、一見鬼氣の人に迫るものがある。觀山は常に舊手法をその理解方に應じて運用し、他の多くの畫家が未成品を作る前に必ず一個の完成味をもたらす。彼の長所はこの點に存する。

支那の風景を取材として、而も勝れた作品は廣業の「夏の一日」と大觀の「楚水の卷」とで有らう。共に支那的情調を表してゐるが、獨創的

なる點は大觀が勝り、諸法を綜合して而も新方面に進まむとする點は廣業が勝つてゐる。

春擧の「寂寥」はその構圖の稍々窮したるあとがないでもないが、さすがにその手腕の見るべきものがある。玉堂の「炊煙」は彼にしては、寧ろ普通作にすべきもので、作家の主觀のあまりに稀薄なるを惜しむ。春草は裝飾的にして而も印象的なる方面に赴かんとするやうである。その「黑き猫」は必ずしも、大作とはいひ得ぬものであるが、その印象的なる點に、漸く彼獨自の疆地が見られぬでもない。

竹坡は「棟木」及び「おとづれ」の二作を出し、共にその手腕の凡ならぬことを示してゐる。前者はその構圖の大膽と用筆の自在と漫畫的趣味との渾和したる點に看るべきものがあり、後者は色彩の諧調に觀者の心持をそそつた。

「供燈」はむしろ平凡の作で、その構圖は却つて高橋廣湖の「少將伊衡」に劣るもの、內容の淺薄にして、色の調子も勝れたものではない。櫻谷の「からくり」も、重厚の趣がなく、一見太だ不快を催さしめるものであつた。

風俗畫として淸方の「女歌舞伎」及び蕉園の作はかなり傑れたものである。前者は多數の人物を使つて、而も賑かな色彩を見せたところに努力の跡が見える。たゞ色の生々しさと、どことなく落ち付きのないのは缺點である。「秋のしらべ冬のまどゐ」は構圖が散漫で、優しみはあるが全體に空氣の薄弱な難がある。

川端玉章その他の老大家の健在は悅ぶに足る。併も唯悅ぶに足るといふに留る。南畫系統の作にも、あまり佳作はない。翠雲の「山海圖」は生硬で、秀畝の「初冬」は不純である。寧ろ田邊竹邨の「秋山曉靄」などに

は、平明な情趣を見出し得る。高島北海の作には常に韻致の缺けてゐるのが弊である。その「蜀道七盤關」は寧ろ愚作といふべきであらう。日本畫を去つて西洋畫を見ると、全體に平靜な氣持が滿ちてゐるやうである。邦畫は多趣多樣であつたが、洋畫にはどことなく一種のおちついた所が見える。それだけ、活氣がないと謂へば、さういへないでもない。

黑田淸輝は自然に對して常にデリケイトなる感覺を失はぬ。そしてそれが圓熟せるその筆技と相俟つて、他の企及し難い高雅なる作物を致す。この點に於て「荒苑斜陽」は場中の傑作たるを失はぬ。中村不折の趣味は年を逐うてクラシカルな偏した傾向を持つ。而もそれが色彩の不純と品位の缺乏とによつてそこに一種の不快なる調子を持つ。「半諸迦尊者」は僅にそのデッサンの優秀なる點を見るに留る。滿谷國四郎は腕の所有者ではあつても、頭の所持者ではない。その「二階」の庸劣なる趣味を見る者

はこの言を疑ひ得ぬであらう。さすがに和田英作には幾何かの才分がある。その肖像は傑作といふべきである。「まともののわかり」よりも、その「薔薇」こそ却つて取るべきものであらう。岡田三郎助の「くもり日」「ひなた」山本森之助の「島」と「いはや」鹿子木孟郎の「紀州勝浦」中澤弘光の「まひる」はいづれも大して不可のないかはりに、又大した傑作でもない。新歸朝者たる山下新太郎の「靴の女」及び「讀書の後」には描法にも色調にも輕快な清新な空氣が漲つてゐる。同じき柳敬助の「夫人」もわるくはないが、同じき南薫造の「座せる女」には、溢れるばかりの藝術味が落ちついて而も上品に表はされてゐる。佳作といふべきであらう。

吉田博の諸作、中川八郎の「巖壁」、青山熊治の「九十九里」の類には、作そのものを通して作者を現はすよりも、畫面そのものから、單にその手腕のみを示すものしか持たない。小杉未醒の「杣」は漸くその裝飾的傾

向に專らなるもの、九里四郎の「老人」中村彝の「海邊の村」田邊至の「窓邊」の肖像はいづれも妥當な解釋のついたものである。

要するに、洋畫では新歸朝者の作が最も注意すべきものであつた。そこにわが邦畫に對する哀しいアイロニイが含まれてゐる。

彫刻三十餘類の中、新海竹太郎の「默」はとにかく場中を壓して立つものである。併し、全身に力の充實はあるが、それに伴ふ一種市氣のややおもしろからぬものがある。朝倉文夫の「墓守」には技巧のすぐれたる所があり、荻原守衞の「女」には一種の暗示的の情趣がある。此の人の死は彫刻界から一の光明を奪つたものといふべきである。

## 第五囘　明治四十四年

文展は全體として年々の進步を見せる。併し、特に傑出した製作の吾

等をして、恍惚たらしむる程のものはない。

日本畫は概して振はない。審査員中最も異色ある作をなしたるものは大觀の「山路」である。古土佐に南畫風の筆を加へ、飄忽たる中に朴純な而も大膽なる境地を啓いて行く點は大觀獨特の境地である。此の繪は古法を復活して新意を汲まむとする點に於て、更に又此の以後幾多の追從者を出して一の新機運を作らうとしてゐる點に於て、文展史に最も注目すべき作である。第三回の寺崎廣業の「谿四題」とこの「山路」とはかゝる意味に於て最も注目に値する。

大觀の作を外にして必ず說くべきものに、玉堂の「細雨」がある。淸楚渾厚、最もその特色を發揮したものであつた。棲鳳に驚くべきはその技巧の練達の三昧に入つてゐることである。而も「雨」の如きはその技巧以外に棲鳳の名を重からしむるものではなかつた。棲鳳振はず、觀山は描かず、

廣業の「支那風景」は彼としては、寧ろ平凡の作で工夫の足りない恨がある。そしてそのいづこにも支那山水の特殊性の見えぬのは何故であらう。玉章翁の「雨後山水」は粗獷の氣はあるが珍しく生趣の溢る作であつた。

先蹤大家の作、斯の如く振はざるに、新進作家の作にも亦、多く推稱すべき作を見なかつた。木島櫻谷の「若葉の山」は漸く京都畫家の通弊たるセピア色を脱してはゐるが、どこかに不純の匂を持つた作である。竹坡には多々益々辨ずると云ふところが見える。「秋草」「梧桐」「水」の三點中、最後の「水」は最も興味が深い。その扇面古寫經あたりから得來つた畫法はこの題材に適してはゐるが、かゝる素描を屏風の大作に用ゐたのは、作の效果の上から見て損なやり方であつた。同じく素描を用ゐたものは吉川準の「菩提達磨」がある。併し、此は素描の妙味を脱して、徒に繁縟の嫌を有するものであつた。

山内多門の「日光山の四季」、及び「漁村」は雪舟あたりを倣つたものであるが、まだ渾化の域に達してゐない。結城素明の「囀」はその洋畫式裝飾傾向に新方面を開拓してゐる。清方の「驛路の女」は蕉園の「髮」に比して遙に傑れてゐた。

新浮世繪とも云ふべき風俗繪を出して大阪畫壇のために氣を吐いたものは北野恆富の「日照雨」であつた。傑作と云ふべき程のものではないが、その傳彩の落ちついて、かなりの品位と情調とを有してゐるのは嘉すべきであらう。國觀の「人眞似」はその彩色の混濁とその市氣の紛々たるのに頭痛を覺えしめる。看來れば、第五回に於ては、僅に二三の佳作を見た以外に、多く推稱すべきものがない。安住のあとが稍場中にあらはれ初めたやうである。併し、時は移る。人は動く。表面安逸なる氣の溢つてゐる中にも、新しき作家の漸くあらはれむとする傾向は看取せられる。

そしてそれらの中に、今村紫紅、前田青邨、平井楳仙、橋本關雪等の名を擧げたい。紫紅の「護花鈴」には莊重なる落付がある。楳仙の「赤土山」には着眼の新味がある。青邨の「竹取」には古繪卷を摸した古雅な味がある。何れも完成した作品ではないが、彼等が何物かを追求し、努力してゐるところが見える。

洋畫は寧ろ邦畫に比較して振つたと云ふことが出來る。

南薫造の名は「瓦燒き」によつて頓に重きを加へた。此は作者の藝術的氣禀が畫面の隅から隅まで行き渡つた作である。純日本風の材料を驅使して、そこに平和なしづかな藝術的天地を創造してゐる。

小杉未醒の「水郷」は彼が漸く自己の行くべき道を見出し得たかと思はれる作である。作物の根柢を流れるものは前の「瓦燒き」と同じものであるが、純裝飾的になつてゐると同時に、完成味のある作であつた。

山下新太郎の「窓際」、有島生馬の「宿屋の裏庭」、中村彝の「女」、坂本繁二郎の「海岸」、柳敬助の「病婦」、津田青楓の「五月のインクライン」、石井柏亭の「サンミユエル橋畔」、藤島武二の「幸ある朝」の如き諸作は何れも、その藝術味の豐かな點、印象の鮮かな點、或は、色彩の豐潤乃至は筆觸の清新な點に於いて、それ〲傑れた作品であつた。

是等に比すると、二等賞といふ榮譽を贏ち得た、青山熊治の「金佛」も、赤松麟作の「午後三時」も大作と云ふ以外に、時間的勞力が多く表れてゐると云ふ以外に、何物をも吾々に與へ得ないものであつた。

審査員の中、黑田清輝の「百日紅」はその藝術味の豐かな點に於いて、自然の印象の極めて鮮かに表現せられた點に於いて、その描法の大膽なる點に於いて最も傑出したるものであつた。

滿谷國四郎の「港の雨」も佳作たるを失はぬ。彼の安價なドラマチカ

ルの構想はいつも、吾等をなやましめるが、自然を題材としたるものには此の弊がない。吉田博、中川八郎の諸作は滿谷のそれに比すると、遙にその價値の劣るものである。中村不折は例の如く「跋陀羅尊者」を描いて、そのデッサンのみを誇らうとしてゐる。

和田英作の「小金井博士の肖像」は肖像畫としてはその解釋の妥當なると、技術の溫和なる點とで優れてゐる。岡田三郎助の「浴場にて」は佳作の部であらう。たゞし、左足と手の指とは甚だ拙劣なるものと云はねばならぬ。

鹿子木孟郎の「インスピレーション」は衆口一致、冷笑の中心となつた。その着想の下凡にして、その傅彩の俗惡なることとによつて、作者の藝術的良心の存在を疑ふものは、二三に留らなかつた。

彫刻中の佳なるものは、朝倉文夫の「土人の顏」であらう。新海竹太

郎の「鐵槌」には力はあるが、いつものやうな匠氣のあるのがおもしろくない。「一致」の方がすぐれてゐる。木彫の中では、平櫛田仲の「維摩一默」がやゝ見るに足るべきものであらう。

朝倉文夫の「産後の猫」は小作だが、一寸おもしろいものであつた。藤井浩祐、堀進二、石井鶴二、武石弘三郎の名も亦かなり注目に値するものであつた。

## 第六回　大正元年

審査といふ藝術家本來の性質とは全然關係のない問題、勢力といふ世間的の問題、情實と云ふいつの時にも免れがたい問題が、いかなる時にも頭を擡げて、平地に波瀾を起さうとする。そしてそれが終に當局を動して第六回に到つて日本畫は第一科第二科に區分せられた。もとより第一

科に屬する邦畫中の保守黨の自ら畫してなしたる所で、恐らく彼等にとつては頗る得意なことであつたらうが、併し、それは、彼等が自滅と嘲笑の運命をより多くしたるものに過ぎない。第一、彼等がその描くところを以つて、一の流派傳統を保存して持續せしめようとするの無意味なることはいふまでもない。次に彼等が考へて以つて、邦畫の多くが洋畫に煩せられて古格の忘られてゐると云ふことも、その考違であつて、彼等の古格は彼等以外の畫家によつて、活用せられ、よりよく有效に用ひられてゐるのである。

之れを第一科の先蹤大家の作に就いて見ても、益頭峻南の「玄雲匝地」、佐久間鐵園の「茂松清泉圖」、高島北海の「積翠」、山岡米華の「水墨夏景山水」、望月金鳳の「松上烏鷺圖」の如き、そのどこに新味があり、そのいづこに古格を追從して古畫の域に到達し得たものがあらう。彼等

が推して二等賞を與へた小坂芝田の「秋爽」、津端道彦の「火牛」、さては池上秀畝の「梢の秋」、田中賴璋の「水郭の春」、松林桂月の「寒汀」、小室翠雲の「四時佳興」の如きに、果して何物を得るであらう。吾等は多くを語るの甚だ無意味なるを思ふ。

第一科に保守の大家を追ひ拂つた二科は、頗る活氣を呈してゐる。横山大觀及び寺崎廣業が各々「瀟湘八景」の大作を出して、龍虎相爭ふの狀を示してゐるのは、蓋し壯觀と謂ふふべきである。そして、此の二人者の特色が、各々その作物に最もよく現はれてゐることも面白いものであつた。

大觀の八景は徹頭徹尾大觀の八景である。彼は八景と云ふ古來の傳統的固習の感じから脫して、そこに彼獨自の八景を創造しようとしてゐる。そこに彼の個性がいかにもよく出てゐる。大觀の作に比すると、廣業の八景はいかにも傳統的綜合的である。彼の勤勉は彼をしてあらゆる八景

の古畫を硏めしめたらしく見える。そして、それ等のすべてを、彼の努力によつて打つて一丸として、そこに新しく描かれたのが廣業の八景である。二者ともに傑作たるを失はぬものながら、そこに此の二人者の特色が現はれ、且つ此の二者の示す傾向が又、今の日本畫の傾向を示唆するものではあるまいか。

大觀、廣業二家の外、審査員としては山元春擧の「嵐峽」、及び川合玉堂の「潮」がある。「嵐峽」はさすがに水の硏究に傑れた點はあるが、たゞそれまでの作である。「潮」は玉堂の作としては、比較的大膽な作であるが、あまり佳作と云ふべきではなかつた。

木島櫻谷の「寒月」は毀譽紛々たる作であつた。併し、毫も寒月の趣がなく、動物の標本めき、一體に彩色の不純を責める人の方が多かつたやうであるが、松本博士の如きは、口を極めて之を賞揚した。夏目漱石氏が

往年の「若草山」と共に不愉快と云つたのは何人も首肯する所であらう。
今村紫紅の「近江八景圖」は大觀廣業の八景圖と共に種々の問題を提供したものであつた。その構圖の苦心、その描法に種々の試をした跡、材料に注意を拂つた點などいづれも推賞に値する。併し、此の繪は完成作ではない。苦悶の繪である。思ふに此の畫は紫紅の悶の象徴ではあるまいか。更に又、日本畫家の悶の示唆ではあるまいか。予は此の繪を以て、又文展十年史中、かかる意味で特筆すべきものと思ふ。
安田靫彦の「夢殿」も亦好評を博したものである。併し、此の繪にとるべきはその技巧の細緻巧麗を極めた點であつて、作者の覗つた夢殿そのものが、遺憾なく表現せられてゐるかどうか、多大の疑なきを得ない。
菊池契月の「茄子」は装飾的傾向をもつたものであるが、中心のない平板な畫面には同情しがたい。茄子の葉ばかりを同じ色で塗りたてゝゐ

るのも智慧のないやり方である。

前田青邨の「御輿振」は往年の「竹取」より一歩を進めた古繪卷研究の結果になるもので、「伴大納言」あたりから得る所のもつとも多いやうに見える。著想もおもしろく、輕妙で變化のあるところ、作者の將來あることを想はしめた作であつた。

山内多門の「郡上十二景」は雪舟あたりを覗つた描寫の努力を買ふべきもの、平井楳仙の「浦づたひ」はその技巧の妙を見るべく、結城素明の「甲ふだる馬」は洋畫式の裝飾的傾向の新味ある點をとるべきである。

西山翠嶂の「青田」、土田麥僊の「島の女」、都路華香の「豐兆」、小林古徑の「極樂の井」、富田溪仙の「鵜船」など、彼等の常に歩まうとする努力のとるべきものがある。

風俗畫は概して振はない。尾竹兄弟の作は大に氣焔上らず、池田蕉園

の「ひともし頃」も、池田輝方の「都の人」もいふべきほどのものでない。島成園の「宗右衞門町の夕」は北野恆富の「日照雨」の亞流で、作者が妙齡の婦人なることと及びその畫の艶麗なることによつて、衆俗の歡を迎へた。

西洋畫では南薰造の「六月の日」が丁度前年の「瓦燒き」と同じ所を行つたものである。たゞ人物と背景とがぴつたりとあつてゐない所に多少の缺點は見えるが、併し、場中での佳作たるを失はぬ。小杉未醒の「豆の秋」は前年の「水鄕」から更に一歩を進めたもので、裝飾的效果の愈々進んだものであるが、圖樣の難をいへば廣いものを强いて狹めた樣な點のある事である。併し、「豆の秋」はたしかに「六月の日」と共に佳作であつた。

審査員の作では鹿子木孟郎の「某未亡人の肖像」と、和田英作の「夫人の肖像」とが、共にその穩健な作風に於て傑れた出來ばえであつた。鹿子木孟郎の「若王寺の瀧」も落ちつきのある作たるを失はぬ。黑田淸輝

の「習作」、「木苺」、岡田三郎助の「偶成」はともに可もなく不可もない出來である。吉田博の三作は色彩が次第に生硬になりつゝある樣に思はれる。

中村不折の趣味は愈出て愈古典的になる。そして斯る題材を油繪で取扱ふのは、確に效果の上から見て不利な遣方である。

中澤弘光、山本森之助、中川八郎の諸作はいづれも穩當である。

佐藤哲三郎の「化粧」は其の濃艶な色彩が人目を惹いた。辻永の「無花果畑」はその得意な羊を描いたもの、池田治三郎の「女四人」と其に佳作たるべきである。

石井柏亭の「荷蘭の子供」に及び「獨逸の女の」二つは新しい行き方で、大野隆德の「落葉を拾ふ小兒等」にはおもしろい看方があつた。

坂本繁二郎の「うすれ日」は作者の內部のあるものが第三者にせまり

來るものが見えた。

彫刻の部では審査員の作品にも、あまり傑出したものはなかつた。員外では朝倉文夫の「若き日の影」が見るべきもので、彼は數年來一作毎に世評を高めつゝある。藤井浩祐の「潭」、建畠大夢の「ねむり」なども先づ無難である。審査については各部とも是非の論があるが、彫刻の部は比較的公平を以て稱せられてゐる。

## 第七回　大正二年

前回に起つた日本畫の分立は、それ自身に於て甚だ無意義なものであり、且つ、其の作物に就いて見る時は、それ自分に存在の理由を否定しつゝあるものであつた。

元來一科を創設した理由が、一部の畫家の黨派的偏見に基くものであ

る。然るが故に、その鑑査にも情實の加はれる點が歴々として指摘することが出來る。駄作、愚作の多いのは謂ふまでもない。

第一科中、特に目立つて多いものは文晁の摸倣である。佐竹永陵の「青山綠水」はその最も甚しきもの、次いで、松林桂月の「松林仙閣」、八木岡春山、岡田蘇水、竝に小坂芝田の作の如き、何れもそれである。益頭峻南の華山を摸倣することも甚しい。然し、彼等の多くは、唯の摸倣で而も一歩もその埓外に出てゐない。加ふるに、江戸傳統の南畫には一種の匠氣紛々たるものがあつて、毫も高雅な韻致がない。是等の以外に高取稚成の「南淵魚水」、大坪正義の「管弦」の流はたゞ倭繪の粉本をたどつてゐるといふ以外に、何物をも見ることが出來ぬ。審査員の作中にも、往々にして愚劣、嗤ふべきものがある。かくて、第一科は全然その存在の理由をさへ失はうとしてゐる。その中に唯一點、一科のために氣を吐く傑

作がある。小室翠雲の「寒林幽居」は則ちそれだ。

翠雲の作には、いつもその才氣の縱横に煩はされて、高雅重厚の致を缺くものが多い。たゞ「寒林幽居」に到つては然らず、筆に猶すこしく落つきの足らない恨はあるが、筆墨ともに熟達して、よく畫面に統一があり整調がある。日本畫のすべてを通じて佳作といふべきものである。田中頼璋の「木曾山、」田近竹邨の「乍晴乍雨」は比較的佳作といふべきであつた。

第二科に移ると、第一科の無味單調に比して、その多趣多様にして佳作の多いのに悦ばされる。併し、審査員の作は概して振つたといふことは出來ない。

横山大観の「松並木」は、すでに同氏の「山路」を見た眼には、それ以上の興味を呼び起すことの出來ない作であつた。殊に、細緻平板に流れて統一と中心とのないのはその缺點であつた。寺崎廣業の「千紫萬紅は」唐朝美

人を描いたものであるが、特に新趣の見るべきものはなく、その紙と墨とを用ゆる技巧に稍見るべきものがあるだけであつた。竹內栖鳳の「繪になる最初」はかなり世俗の悅を買ひ得た作であつたが、それは畢竟、世俗の趣味の低級なることを證するものに過ぎない。形態の拙なるはいふまでもなく、市氣匠氣の見るに堪へないものがある。山元春擧の「春夏秋冬」はその得意の擅場ではあるが、彼の作として特に推稱に値しない。川合玉堂の「夕月夜」、「雜木山」の二作は稍振へるものであるが、玉堂の弊はその調子のいつも同一で殆ど變化のない點にある。二作の中では「夕月夜」の方がまさつてゐると云ふ一般の世評であつた。

木島櫻谷の「驛路の春」は翠雲の「寒林幽居」と共に邦畫中の傑作と謂ふことが出來る。「驛路の春は」その構想の溫健で、春風駘蕩たる太平を想はせるに足る。その技巧は狩野の一派に新味を附し、京都畫家一流

の輕薄の點がなく、特に傳彩の苦心に見るべきものがある。

審査員外の作としては、菊池契月の「鐵漿蜻蛉」がある。平板ではあるが、その色彩の淡泊で一種夢幻に似た靜境を描き出して、やゝ見るべきものがあつた。鏑木清方の「潮干狩」は佳作と謂ふべきであらう。橋本關雪の「遲日」には溫雅な筆で、ある程度にその氣持の出てゐたのを取るべきである。堅山南風は「霜月頃」を出して忽ち名をなしたが、まだ研究の餘地ある作と云ふべきものであつた。結城素明の「相思樹下金絲圖」は氏の特長を更に發揮したもので出色のものであつた。

牛田鷄村の「町三趣」は完備した作とはいひがたいが、一種の漫畫式の畫法に、蕭散な趣味を加へ、ある種の感じを描き出さうとする努力の買ふべきものがある。

この頃になつて次第に氣のつくことは、新しき試の多くが、裝飾的傾

向になりつゝあることである。そして寫生が多く細部にのみ流れて、全體としての印象を稀薄ならしめるものが多い。大觀の「松並木」の如きも、この弊を有するものと謂はねばならぬ。裝飾的傾向はそれ自身に於て必ずしも非難すべきものではない。唯、純然たる裝飾畫以外の作としては、裝飾的傾向以上により緊要なものがある。かつての觀山の「木間の秋」や春草の「落葉」にも裝飾的傾向は認められる。併し、此の二作の如きも裝飾以外に自然の心核に觸れる點を有し、觀者に生々たる印象を與へ得た。文展の日本畫が年を追うて、一種の惡趣味を生じつゝあることは、一部識者の寒心を買ふ所以であつた。

日本畫が次第に畫面の大を競うて、邪道に走らうとするとは反對に洋畫は次第に内省的ならむとする傾向を有するやうになつて來た。併し、一面、大作の殆んど見るべきものゝなくなつたのも事實とすれば、悅ぶ

べき傾向と云ふことは出來ぬ。

西洋畫へ轉じても審査員の作品には之といふ程の見ることの出來ないのは遺憾である。鹿子木孟郎の「加茂の競馬」は繪馬の如く、黒田清輝の「足立軍醫監」及び「蘭花」の二作もさしたる作とは思へぬ。岡田三郎助、中澤弘光、中村不折、山本森之助の諸作も、唯從前の面目を保つものと云ふに止る。

石井柏亭の「滯船」は清新で氣持のいゝものであつた。南薫造の「春さき」はしづかな情景のよく出てゐる點をとる。石川寅治の「渡の午後」はやゝペンキ畫たるの感はないでもないが、かなり努力のはいつた作である。

藤島武二の「うつつ」は技巧の大膽な點と、筆致に興味がある。長原孝太郎の「殘雪」は裝飾的傾向の新しい試みではあるが、醇熟の域には達

しない。

齋藤豊作は色彩に對する感覺の豐潤な點に於て、人の意表に出づるものがある。「夕映の流」はその點に於て特筆に値する。

彫刻の部では依然として朝倉文夫の作を推す。「含羞」はその氣持のよくあらはれた無理のない作である。藤井浩祐の「坑內の女」も佳作にすべきであらう。審査員中の作品では新海竹太郎の「價千金」をとるべきであらう。

## 第八回　大正三年

文展は次第に出でて次第に益々對世間的となり、そこに安住し、滿足して、ともかくも平和な倦怠な夢を續けてゆく。併し、夢はいつまでも續かない。文展改革といふ問題は、審査員の變化を生じた。そして横山大

觀の名が審査員中より除かれたのを機として、下村觀山は自ら之を辭し、二人相倚り、更に小杉未醒と結んで、日本美術院を創設した。蓋し岡倉覺三、橋本雅邦の一派と官畫との歷史的關係を知るものは、寧ろその事のあまりにおそいのを怪しんだかも知れぬ。

多少の例外はあるが、美術院派には新進氣鋭、ともかくも問題を提供する畫家が揃つてゐる。故に、量は僅に文展の三分の一にも滿たない美術院の第一回の展覽會もその質に於ては、一歩も文展に譲るところがなかつた。殊に、前田靑邨の「竹取」の如き、安田靫彦の「御產の禱」の如き作物の文展に見ることの出來なかつたのは、衆口の一致して殆ど異議のない所であらう。

分立はひとり美術院にのみ留らなかつた。洋畫には更に又二科展覽會の起るものがあつた。されば、これら渦亂の第一年たる文展は多少の與

味を以て迎へられた。併し、寂寥は到る所に見出された。殊に日本畫に到つては院展が振へるだけに、更に又栖鳳、春擧の如き大家の出品がないだけに、その感の更に深いものがあつた。

改革の結果、日本畫の二科存立は中止となつた。之は寧ろあまりに當然なることである。審査員中では川合玉堂の諸作に最も見るべきものがある。「晩渡」、「駒嶽」、「夕立前」の三幅中、最後の作は、彼の蘊蓄を傾倒し、その特色の最も發揮せられたものであつた。寺崎廣業の「高山清秋」は觀山なく大觀なきの後、問題の中心たるの感があつた。然し、苦心努力の割合には印象の稀薄な恨があつた。それは、畫面の眼界があまり廣きに失して、緊張味に缺けてゐたからである。高島北海は畫家たり詩人たるには、あまりにその頭腦の科學者にちかく、科學者たるにはあまりに畫家に近い。その「魚介」の繪手本ともつかず、博物標本ともつかぬを

見れば、誰しも吾が言の人を欺かぬを知るであらう。
余はあまりに小室翠雲の作に、出來不出來の多いのに苦しむ。「寒林幽居」を出した後の彼に「逍遙」の如き、覇氣あり市氣ある作物を見るのは、果して何の故か。南畫としては、池田桂仙の「山高水遠」こそ見るべきものである。
木島櫻谷の「涼意」は單調ではあるが、その作畫の機縁の温雅なるを取るべきであらう。併し、之も「驛路の春」を見た眼に物足りないのはいふまでもない。契月の「ゆふべ」はその卑俗なる點の最も忌むべきは、いかなる故か。此をしも二等賞の一席に推した審査員の雅量は寧ろ憫むべきである。西田翠嶂の作「採桑」は櫻谷の「涼意」に近いもので、「ゆふべ」より遙に勝る。都路華香の「閑雲野鶴」は不快の作といふべきだ。
上村松園の畫は可もなく不可もない。風俗畫としては、鏑木清方の「墨

田河舟遊」及び池田輝方の「南國」を擧ぐべきであらう。二者ともに醇熟の境に近く、大構圖中よく統一あり、形似に無理もない。傅彩も亦かなり要を得たものである。國觀の「假睡」を見て、「油斷」の作を出した當年の意氣の銷磨し去れるを哀み、竹坡の作の漸く淺薄なるを惜しむものは、單に余のみではあるまい。

川村曼舟の「比叡山三題」、橋本關雪の「南國」、平井楳仙の「遼河の夏」の如きは、いづれもかなり新味を追ふに努め、土田麥僊の「散華」はその古典的なる題材に近代的感情をもらうとし、動的氣分をあらはさうとする努力の嘉すべきものがあるが、研究の餘地あることはいふまでもない。

平福百穗はかつて「茄子」の作を出して、人目を惹いたが、今回の「七面鳥」も亦附記するを忘れてはならなかつた。ただ意匠の貧弱な點を恨みとすべきである。

北野恒富の「願の糸」は直に人間を描いたものではなくて、人形芝居から得來つたものかも知れぬ。而も、その憧憬的氣分のみちた命題の最もよく描かれてゐる點は賞すべきである。

楳仙の「宮苑」も亦氣分本意の點で注目すべき作である。

西洋畫は二科會の分裂によつて、却つて、彼等に近い手法の漸く見え來らむとする點で興味を覺えた。

満谷國四郎の「浴後」には描法に變化を見ることは出來るが、むしろ力の足りない作である。「砂丘の裏」の方がまさつてゐる。中村不折の名は久しき前から吾々の興味を去つてゐる。「處女」及び「卞和玉を抱いて泣く」の二作から、吾等は何を敎へられるであらう。

中澤弘光の「ながれ」は、作家の情緒と自然の韻律との融合して出來たやうに見える點に、妙味がある。黒田清輝、和田英作二氏の作は、大

した變化もなければ、さりとて見劣りのするものもない。

吉田博、中川八郎の諸作には多く云ふべきものがなく、小林萬吾の「和蘭の歌姫」はおもしろい出來である。

白瀧幾之助の「野村氏の像」はその穩健なる點を賞すべきである。「うらゝかな朝」が親しみ易い。太田喜二郎の作は色も調子も整つてゐて佳作たるを失はぬ。中村彝の「少女」はその豐麗な色彩を驅使して、「少女」の肉體を通して現はれる感情を現した點がいゝ。對象にあくまで自己の感情を打ち込むだけに、充實した力がある。小寺健吉の「淺草の夏の眞晝」には構圖の上に難がある。片多德郎の「夏山急雨」には、自然の印象を再現するに獨創的の境地がある。作畫の機緣には南畫やキユウビツムが加つたかも知れぬが、とにかく、心持の出てゐるのはうれしい。

山脇信德の「午後の海」も一種の畫面美を持つ。

彫刻の興味は吾々にとつては、いつも繪畫よりも後に來り、而も薄いものである。

「いづみ」は朝倉文夫の作だ。そして場中の佳作である。感興の動くまに從つて、而も精確の度を失つてゐない。北村四海の「水の精」は部分的に調子の甘味がある。小倉右一郎の「不惑」には、達者な技巧を見ても眞摯のあとを見えない難がある。新海竹太郎の「全力」は佳作と云ふべきであらう。併し、此が果して氏の全力を意味するものならば、彼のために哀しまなくてはならぬ。

## 第九囘　大正四年

文展對美術院と云ふことは、他の種の展覧會の文展に對するよりも、もつと眞面目に考へられた。何故かといへば、少くとも其の日本畫だけ

に就いて見ると、美術院派は俊英の士を蒐めて研鑽努力、年を追うて人の視聽を惹かうとするものがある。彼等は一切に於て未知數である。而もその未知數なる所に大なる彼等の未來がある。畫界の新機運の或る方面は過去に於ても、彼等によつて誘導せられ啓發せられて來たからである。今後の消長も彼等に負ふところ最も大なるものありと考へられるからである。

公平にいふと彼等一派を拔いた文展の日本畫は頗る氣焰の上らないものであつた。そして、彼等を除いた後に殘るものは、大家に多くは京都派の者があつた。概していへば京都派はその趣味に於てその傾向に於て退嬰的であり保守的である。こゝに於て院展が進取的であるに比して、文展は退嬰的と云ふも、妨げないとも思はれる。

再び公平に謂はしめよ。第一回の院展と同年の文展とを比較すれば、

その多趣にして活氣の横溢し、內容の精整せる點に於て、文展はたしかに院展に一等を輸したのであつた。是に於て世の視聽は、二者の今後に於ける發展に最も注がれるに到るのである。

然らば第九回の文展の日本畫は如何。第二回院展の邦畫は如何。文展を說くに院展を出さぬは對照上、興味の薄い恨がある。

第二回の院展は前年に比して更に振つてゐるやうである。下村觀山は「弱法師」の大作に、その蘊蓄を傾けて渾厚溫雅、技巧と內容との間に寸分の隙なき傑作を示し、大觀は「漁樵問答」と「竹雨」とに於て、作の良否はともかくも、手法上の問題を提供し、小林古徑は「阿彌陀堂」を描いて冥想的神祕の境を宗敎的古建築に寄せて、識者を悅ばしめ、前田靑邨は繪卷物硏究の步を進むること更に一段、「朝鮮の卷」に從來の輕佻を脫して健實味を想はしめ、富田溪仙の「宇治川の卷」は粗獷の難ありと雖も、ま

た捨て難く、竪山南風は「作業」に於てその努力を示し、今村紫紅は「入る日出る月」に於て、牛田雞村は「隅田川」に於て、北野恒富は「鏡の前」に於て、荒井寛方は「乳靡供養」に於て、何れもその技倆を世に問うてゐる。觀山の作を除いて未だ渾成の域に達したものはないが、而もいづれの作も問題を提供しないものはない。唯大觀の「山路」、「松並樹」、乃至は「瀟湘八景」を倣うた畫風が、一の院展の色彩を作らうとしてゐるのは、自由を標榜し拘束を無視して立つ彼等としては、警戒に値するが、何れにしても、その活氣あることは特筆に値する。

精養軒の院展を去つて竹の臺の文展に入ると、其の數の多いのに一驚を喫する。再びその美人畫の多いのに愕く。三度平作凡作乃至駄作の少なからぬに驚く。最後に特筆すべき作の甚だ稀なるに驚く。

余は寺崎廣業の不斷の努力を嘉す。而して彼が、文展の邦畫を雙肩に

負うて立つの意氣を壯とす。「夜聽歌者」は彼に於ては、さしたる傑作ではあるまい。それよりも、渦染法によるその「信濃の山路」は、その研究的態度に服すべきと共に、佳作たるを失はぬ。

土田麥僊の「大原女」はその手法の大膽で破格な點に於て、寫生の根柢より脫したる裝飾傾向の點に於て、廣濶なる氣分を現すことに於て、完成はしてゐないが、傑れたものである。

鏑木淸方の「晴れゆく村雨」は怖く春信あたりから得る所があつたものであらう。人物と蓮池との見方に於て筆者の位置の上の矛盾のあるのを除けば、筆の操縱と描寫の苦心に見るべきものがある。畫面の大に失したと云ふ恨はもとよりあるが。北野恒富の「暖か」はその感覺的なる點に於て人目を引く。更にその追從者の多いのにも驚かれる。

木島櫻谷の「うまや」は稱しがたく、契月の「浦島」は褒貶相半ばす

るも、夢幻的冥想的神祕的傳說的境地を描くに、友禪じみたる卑俗なる裝飾的描法を以てしたるは許しがたい。

町田曲江の「三大門」はその氣分のあらはれてゐるのがいゝ。三幅中では「出城」がいゝ。

平井楳仙の「夏」は洋畫の影響のあまり露骨になつてゐるのを惜しむべきだが、その努力は買ふに値する。橋本關雪の「獵」は才氣に煩はされて稍淺薄の恨はないか。構想の新意と寫生と裝飾の中間を行く中庸を得た製作である。「峽江の六月」の方が遙にいゝ。

池田輝方の「木挽町の今昔」は單に衣裳のみで今昔の區別を現はさうとしてゐるのはよくない。上村松園の「花がたみ」は開場前の評判に比しては頗る失望すべきものであつた。

高島北海の「峭壁摩天、斷層夾波」は愚作である。田中頼璋の「四季

の山」は筆に熟練の迹は見えるが、平凡の識を免れない。小室翠雲の「夏景山水」、「駒ヶ嶽秋粧」では後者の方が佳い。手法の健實なる點の漸くまして來たのは、よろこぶべきである。

平福百穗の「朝露」は前年の「七面鳥」に比しては、劣つてゐるといふのが、一般の世評であつた。川村曼舟の「連峰映雪」には生硬の難を免れないと思ふ。

要するに院展の方は歩武の調うてゐる點がある。理解の伴うた努力が見える。文展には稍もすると、倦怠安住のあとが見られ、審査の不統一と云ふ難がある。

西洋畫

審査員の作品中吾等の興味を惹く作は殆どない。藤島武二の「匂ひ」は即興的ではあるが、色の階調に味がある。「空」と題する雲を描いたも

のは聊か鬼面嚇人の趣がある。

黒田清輝の作には常に一種の氣韻がある。「跡見刀自」と云ふ肖像も傑作ではないが、その點がいゝ。

滿谷國四郎の「魚市場」、「行水」はやゝおもしろい。岡田三郎助の「五十島の雪」は調子の微妙な中に情趣がある。

長原孝太郎の「晩春」はその年來進みつゝあつた傾向の漸く醇熟し來つた事を調する作で、東洋趣味を根柢として、新趣ある裝飾畫をなしてゐる

小寺健吉の「水のほとり」は氣持のいゝ佳作と云ふに留る。大野隆德の「麥はたき」は往年の南薰造の作を想はせるものである。太田喜二郎の「薪」は畫面を大きくした點から來る構圖上の失敗が見える。「薪」よりも「暖き日」の方が遙にいゝ。南薰造の「農家の娘」及び「葡萄棚」を見ると、氏の傾向に漸く動搖のあることを思はせる。

中村彜は人物の研究に於て、獨自の境地を持つてゐる。何よりもその態度の眞摯で、行くところまで行くと云つた調子が他の及ばぬところであらう。

柚木久太の「入江」は洋行後の初作として、佳作たるを失はぬ。海水などには一種の感じがおもしろく出てゐる。併し、まだ充分自分のものになつてゐないと云ふ點がありはしないか。小糸源太郎の「雨のあと」はいゝ作だ。

三宅克已は水彩畫に十年一日の如く努力を拂ふ。「冬の小川」は周圍に無頓着に、かなりの感興の籠つた佳作と云ふことが出來る。

最後に和田英作の愚作「佐用姫」は往年の鹿子木孟郎の「インスピレーション」と共に、特記する値がある。

## 彫刻

北村西望の「怒濤」は往年の和田三造の「南風」中の人物を思はしめるやうな作である。大作で無理のない作ではあるが、併し、作家と云ふもの丶現はれてゐない内容の空疎な作ではあるまいか。西望のそれに比して、北村「四海のイヴ」は場中の出色ある作である。材料驅使の理解はその裸體研究と相俟つて細緻な豐潤な效果を齎してゐる。

堀進二の「老婆の肖像」はその眞摯な點をとる。

新海竹太郎の鬼面嚇人の態度も漸く鼻につく。「釋迦八相」、「長袖善舞」の二作はいづれもとりがたい。建畠大夢の「夜の深み」もとりたてゝいふべき作ではない。

長谷川榮作の「春よ永劫なれ」は作者の今後を思はしめる。

## 第十回　大正五年

文展も終に其の第十年を迎へた。年々歳々、質に量に多少の進歩發展を見せてはゐるものゝ、今更考へて見ると、かなりの心細さを覺ゑぬでもない。とはいへ吾等は日本画壇の將來に對して杞憂を抱くものでは無論ない。唯、文展と云ふもののために、生じて來る一種の眞面目を欲いた傾向に對して、少なからず反感を持つ。

日本画の部は概して振はないと云ふのが妥當の評であらう。一ヶ月前に開かれた美術院の展覽會にかなり優秀のものがあつたために、特に此の感を深くせられるのかも知れない。何よりも驚くべきは、大作が多くなつたことである。殊に百數十點の出品中、屏風が其の三分の一を占めてゐるのには、驚を繰り返へさせられない譯には行かない。大作必ずしも不可ではないが、徒に画面の大を競うて人の視聽を惹かうとするものあ

らば、その志を陋とすべきである。

渾厚醇熟、審査員の作中最も見るるべきものは、蓋し、川合玉堂の「行春」であらう。之は溪流に櫻の咲き殘れるのを描いたもので、水や櫻花の描寫はさすがと思ふ點がある。右方の巖壁のぎこちなく而も平板なのは憾むべきだが、全体に行春といふ因襲的な感じを主とした作で、其の感じを或る程度まで彩色によつて表現した點を稱すべきであらう。山本春擧の「山二題」はあまり推稱しがたい。二作中、「たにむなし」の方がすぐれてはゐるが、手法の大膽はあるけれども、山の色は不快である。高島北海の「富士の裾野」は草花を描いたもので、依然として標本画の域を脱しない。小室翠雲の「天空海濶」は大作ではあるが、佳作ではない。寺崎廣業の「清麗」は唐美人を描いたものだが、之は必ずしも人物本位の画ではなく、唯、その美人の衣裝や表情や其の背景を以て、清麗

といふ氣持の表現に努力したものである。衣裝には眼ざむる程鮮麗な傳彩と暢達せる手練とがある。木島櫻谷の「港頭の夕」はこの作者としては、かなり行方のかはつたもので、平板の難のないでもないが、いつも見るやうな色彩に不快の點のないのはよい。菊池契月の「花野」は色彩の淡麗温雅で稍單調な點はかつての「鐵漿蜻蛉」に似てゐる。そして其の圖樣は第二回院展の下村觀山の「弱法師」に得る所があつたらしく見ゐる。未だ「弱法師」ほど渾化の域に達しがたいが、塲中の佳作とすべきであらう。

員外の作に就いていへば、橋本關雪の「練丹」及び「寒山拾得」の二作には腕に任かせて描いたといふ跡が見ゐる。そして一種厭ふべき匠氣がある。關雪のために取らない。平井楳仙の「都三十景」はともかくも努力の作である。併し、かうした作品はわけもなく一樣に並べて見るべ

きものではない。この画は三回の院展の前田青邨の「京八景」と比較すべきものであらうが、後者の方がいづれもまとまりのある作であつた。

尾竹竹波の「ゆたかなる國土」は陶器画的の淺薄なものである。尾竹國觀の「文姫歸漢」は卑俗の画である。小野竹橋の「島二作」は佳作である。二作中では「早春」の方がすぐれてゐる　此の人は往年の南薫造と共通なものを持つてゐるやうである。桐谷洗鱗の「佛地憧憬の旅」はその努力の見るべきものがある。小山榮達の「北國さむらひ」は平板で中心のない繪である。池上秀畝の二作中では、「文姫辞胡」は繁縟の嫌がある。「夕月」の方が色の上に難があつても稍すぐれでゐる。田中頼璋の「山月四趣」中では春と冬とが比較的勝れてゐる。土田麥僊の「三人の舞妓」は其の大膽なる表現が眼につく。

池田輝方の「夕立」は右方がすぐれてゐるが、蕉園の「去年の今日」

と共に中心のない繪ではあるまいか。松岡映丘の「室ぎみ」は珍しく生趣のある画として推稱すべきであらう。

結城素明の「歌神」も記すべきもの。平福百穗の「田澤湖傳說」は院展の川端龍子の「靈泉」を思はしめる作だが、印象が薄弱である。

## 西洋画

黑田淸輝の「茶休」は淸楚なる画てある。滿谷國四郎ではその行き方の變化が眼につく。今後の傾向こそ見ものであらう。和田英作の「あけがた」は愚劣である。岡田三郎助の「ヨネ桃の林」は小品だけれども、「水浴の前」よりも勝れてゐる。中川八郎、山本森之助、吉田博などの繪はいつも殆ど同じやうなきまつた感じのする画ではあるが、自然を見る眼がその表面にのみしか及んでゐない。

南薰造の画は次第に推移しつつある。その「石橋」は、藤島武二の

「靜」と共に見るべきものであらう。中澤弘光の作では「春日の神子」よりも「青き光」の方がまとまつてゐる。太田喜二郎の諸作は概して稱しがたい。それよりも小糸源太郎の「春」や「秋」が心を惹いた。

大野隆德の「高原に働く人」小寺健吉の「水鄕初夏」柚木久太の「湖雲一帶」などは、とりどりに佳い作である。

三宅克己の水彩では「夏景色」にまとまりが見えた。

彫刻の部では、新海竹太郎の「甲種合格」は俗惡である。「龍樹」の方がすぐれてゐる。北村四海の二品では、「水のほとり」がいゝ。朝倉文夫の「加藤先生の像」は穩當な出來である。その外では、北村西望の「栗」長谷川榮作の「S氏の像」國方林三の「春の夢」などが眼についた。

# 受賞品及審査員錄

# 第一回審査員

委員長　澤柳政太郎　　　　主事　正木直彦

第一部　日本畫

主任　中澤岩太　　　　松井直吉
大塚保治　　　　松本　靖
高嶺秀夫　　　　岡倉覺三
川端玉章　　　　荒木寛畝
今泉雄作　　　　藤岡作太郎
橋本雅邦　　　　寺崎廣業
下村觀山　　　　菊地芳文
竹內栖鳳　　　　野口小蘋
今尾景年　　　　川合玉堂
横山大觀　　　　山元春擧
松本楓湖　　　　小堀鞆音

第二部　洋畫

主任　松井直吉　　　　中澤岩太

森林太郎　黒田清輝
岩村透　淺井忠
松岡壽　久米桂一郎
岡田三郎助　和田英作
中村不折　小山正太郎
滿谷國四郎

第三部　彫刻

主任　塚本靖　大塚保治
高村光雲　石川光明
竹內久一　長沼守敬
白井保次郎　新海竹太郎
新納忠之介　大熊氏廣

## 審査員出品

片時雨　東京　川合玉堂
二百十日　東京　横山大観
雨霽　京都　竹內栖鳳
木下暗　東京　川端玉章
曙色　東京　横山大観
海月　京都　山元春擧

静女舞　東京　松本楓湖
春秋花鳥　京都　菊池芳文
大澤博士肖像　東京　岡田三郎助
肖像　東京　岡田三郎助
彫刻家　東京　中村不折
白芙蓉　東京　黒田清輝
ゆあみ　東京　新海竹太郎
大佛開眼　東京　寺崎廣業
木間の秋　東京　下村觀山
高橋義雄氏肖像　東京　岡田三郎助
白頭翁　東京　中村不折
武士の山狩　京都　淺井忠
購夢　東京　滿谷國四郎
露營　東京　新海竹太郎

# 第一回優賞品

## 日本畫

### 二等賞

しぐれ　京都　木島櫻谷
賢首菩薩　茨城　菱田春草
辻説法　東京　野田九浦

### 三等賞

長夜　京都　上村松園
阿房劫火　茨城　木村武山
平和　東京　鈴木華邨
廣寒宮　京都　西山翠嶂
豐公　東京　安田靫彦
悲報に接したる佛徒　東京　町田曲江

西鶴のおなつ　東京　島崎柳塢　曉風　京都　服部春陽
秋景山水　愛知　山本梅莊　六の華　東京　長野草風
石清水　京都　都路華香　釋迦蘋王　東京　信近春城
大宮人　東京　村田丹陵　落日　東京　植中直富
月下溪流　東京　野村文擧　まみづ鹽水　京都　樫野南陽
落葉　東京　島內松南　もの詣で　東京　榊原蕉園
咆哮　京都　西村五雲　山嫗　京都　谷口香嶠
諸菩薩問維摩詰　東京　橋本永邦　晩秋　京都　川北霞峯
驟雨　東京　山內多門　山法師　東京　鴫下晁湖

### 西洋畫

#### 二等賞

南風　東京　和田三造

#### 三等賞

森の奥　東京　山本森之助　夏の光　東京　中川八郎
夏　東京　中澤弘光　物思　東京　小林萬吾
ともしび　東京　橋本邦助　新月　東京　吉田博
畫室の沈默　東京　高村眞夫　女繪師　東京　岡吉枝

畫室の一隅　東京　村上天流

夕の岬　東京　跡見

彫刻

三等賞

神來　東京　米原雲海

ゆくへ　東京　毛利教武

## 第二回審査員

委員長　岡田良平

主事　正木直彦

### 第一部　日本畫

主任　中澤岩太

松井直吉

大塚保治

松本　靖

高嶺秀夫

岡倉覺三

川端玉章

荒木寛畝

今泉雄作

藤岡作太郎

寺崎廣業

下村觀山

菊池芳文

竹内栖鳳

野口小蘋

今尾景年

川合玉堂

横山大觀

山元春擧
小堀鞆音
野村文擧
益頭峻南
松本楓湖
高島北海
山岡米華
望月金鳳

第二部　洋畫

主任　松井直吉
大塚保治
塚本靖
黑田淸輝
松岡壽
岡田三郎助
中村不折
滿谷國四郎
中澤岩太
藤岡作太郎
森林太郎
岩村透
久米桂一郎
和田英作
小山正太郎
鹿子木孟郎

第三部　彫刻

主任　塚本靖
中澤岩太
高村光雲
大塚保治
松井直吉
石川光明

竹内久一　長沼守敬
白井保次郎　新海竹太郎
新納忠之介　大熊氏廣

## 審査員出品

秋山遊鹿　東京　川合玉堂　　雨雪　東京　川端玉章
本郡高山植物　東京　高島北海　　飼はれたる猿と兎　京都　竹内栖鳳
水車　東京　野村文擧　　水墨山水　東京　山岡米華
雪松圖　京都　山元春擧　　幽香楚々　東京　益頭峻南
月　東京　寺崎廣業　　宿鴉　京都　菊池芳文
春花　京都　菊池芳文　　雪中群猿　東京　望月金鳳

## 第二回優賞品

### 日本畫

#### 二等賞

名士弔喪　京都　菊池契月　　勝乎敗乎　京都　木島櫻谷

#### 三等賞

月かげ　京都　上村松園　　竹徑春淺　京都　川北霞峯
青山白雲　東京　小室翠雲　　鳴瀧　東京　田中賴璋
轉迷開悟　京都　西山翠嶂　　おないどし　東京　島崎柳塢
諸神歡呼　京都　都路華香　　閑庭　京都　上田萬秋
勿來關　東京　津端道彦　　秋郊　京都　山田耕雪
やよひ　東京　榊原蕉園　　深遠　東京　小阪芝田
罰　京都　土田麥僊　　まきばの朝霧　東京　野村雪江
秋ばれ夕ざめ　京都　阿部春峰　　秋山薄暮　京都　德田隣齋
出陣　東京　荒井寬方　　驢馬に夏草　京都　村上華岳
黄昏　京都　川村曼舟　　遠智門圖　東京　尾形月三
寒林暮靄　京都　田近竹邨

## 西洋畫

### 二等賞

煒爆　東京　和田三造　　雨後の夕　東京　吉田博

### 三等賞

北國の冬　東京　中川八郎　　中條君の肖像　英國　フランクベレスフォード
曲浦　東京　山本森之助　　水のほとり　東京　橋本邦助

少女の肖像　東京　大森安仁子　夏の様　東京　高村眞夫
晩煙　東京　跡見泰　雄鹿半島の一角　東京　中澤弘光
漁夫の娘　東京　岡吉枝　ものおもひ　東京　石橋和訓
蘭　東京　石川寅治　藏　東京　九里四郎
初冬　東京　三宅克巳

彫刻

二等賞

闇　東京　朝倉文夫

三等賞

閑靜　東京　建畠大夢　寒山子　東京　米原雲海
大葉子　東京　山崎朝雲　春秋一對　東京　北村四海
文覺　東京　荻原守衛

## 第三回審査員

委員長　岡田良平　主事　正木直彦

第一部　日本畫

主任　中澤岩太　松井直吉
大塚保治　松本　靖

高嶺秀夫
岡倉覺三
今泉雄作
寺崎廣業
芳池芳文
野口小蘋
川合玉堂
山元春擧
小堀鞆音
野村文擧
益頭峻南
川端玉章
荒木寛畝
藤岡作太郎
下村觀山
竹内栖鳳
今尾景年
横山大觀
松本楓湖
高島北海
山岡米華
望月金鳳

## 第二部

### 洋畫

主任 松井直吉
大塚保治
藤岡作太郎
黒田清輝
松岡壽
岡田三郎助
中澤岩太
森林太郎
塚本靖
岩村透
久米桂一郎
和田英作

中村不折
満谷國四郎
小山正太郎
鹿子木孟郎

第三部 彫刻

| | |
|---|---|
| 主人 塚本靖 | 大塚保治 |
| 中澤岩太 | 松井直吉 |
| 高村光雲 | 石川光明 |
| 竹内久一 | 長沼守敬 |
| 白井保次郎 | 新海竹太郎 |
| 新納忠之介 | 大熊氏廣 |

## 審査員元審査員出品

| 題 | 地 | 氏名 |
|---|---|---|
| 霧 | 東京 | 川合玉堂 |
| 高嶺の雲二 | 東京 | 川合玉堂 |
| 流燈 | 東京 | 横山大觀 |
| 淺絳秋景山水 | 東京 | 山岡米華 |
| 鹽原の奥秋冬 | 京都 | 山元春擧 |
| 山寨及時 | 東京 | 益頭峻南 |
| 高嶺の雲一 | 東京 | 川合玉堂 |
| 春景山水 | 東京 | 川端玉章 |
| あれ夕立に | 京都 | 竹内栖鳳 |
| 鹽原の奥春夏 | 京都 | 山元春擧 |
| 小楠公於四條畷奮戰 | 東京 | 松本楓湖 |
| 旅路 | 東京 | 小堀鞆音 |

秋山雨後　東京　寺崎廣業　溪四題　東京　寺崎廣業
纖月　京都　菊池芳文

# 第三回優賞品

## 日本畫

### 二等賞

落葉　東京　菱田春草　油斷　東京　尾竹國觀

### 三等賞

雪中山水　東京　山室翠雲　茸狩　東京　尾竹竹坡
霞む春晴るる秋　東京　田中賴璋　細雨空濛　京都　田近竹邨
惡者の童　京都　菊池契月　宴の暇　東京　榊原蕉園
和樂　京都　木島櫻谷　浦の夕　京都　川北霞峯
山村暮靄　京都　川村曼舟　牧童　京都　疋田芳沼
射戲　東京　荒井寬方　沒落　京都　平井楳仙

### 褒狀

群鴨圖　東京　鈴木華邨　曉靄　東京　田村豢湖
後苑　京都　阿部春峯　牛小屋の夕　京都　高橋菱雨

花見　京都　西山翠嶂　山雨欲來　東京　小坂芝田
桃園三傑　東京　山田敬中　寂寥　京都　高瀬春曉
三友　京都　八田春翠　獅子　京都　望月青鳳
與市宗高圖　東京　尾形月三　失意　東京　橋本關雪
放虎　東京　栗野觀鳳　施身聞偈　東京　島内松南
春の長夏の夕　東京　野村雪江　鏡　東京　鏑木清方
花屋の庭　京都　古谷藤三　秋雨　東京　保間素尚
八百屋のかど　京都　人見勇市

西洋畫

二等賞

おもひ出　東京　中澤弘光　濁らぬ水　東京　山本森之助
千古の雪　東京　吉田博

三等賞

瀬戸内海　東京　中川八郎　美人讀書　在英　石橋和訓
砥石切　東京　跡見泰　幕間　東京　橋本邦助
停車場の夜　東京　高村眞夫　渡舟　東京　小林萬吾
湯ヶ島　東京　三宅克巳

褒状

深山の夕　東京　眞山孝治
停車場の朝　東京　山脇信德
山品　東京　中村彝
三輪　東京　三上知治
海女　東京　岡吉枝
白かすり　東京　渡邊ふみ
元學習院　東京　加藤靜兒
夕涼　東京　矢崎千代二
眞夏の山毛欅　東京　河合新藏
碓氷の初冬　東京　中野營三
かぼちや　東京　寺澤孝太郎
葡萄　東京　石川寅治
入道雲　東京　長原孝太郎
蠟燭　東京　熊谷守一
熊野河口　東京　石井柏亭
山村　京都　都鳥英喜
森　東京　相田寅彦
靜物　東京　永地秀太

彫刻

三等賞

山から來た男　東京　朝倉文夫
北條虎吉肖像　東京　荻原守衛

褒状

焦心　東京　國方天海
宇宙　東京　米原雲海
ゆく秋　東京　建畠大夢
疲勞　東京　藤井浩祐
雄風　東京　北村西望

# 第四回審査員

主事　正木直彦

## 一部

主任　平山成信

今泉雄作

高島北海

下村觀山

菊地芳文

谷口香嶠

川合玉堂

中川忠順

山元春擧

益頭峻南

望月金鳳

松本亦太郎

松井直吉

川端玉章

荒木寛畝

寺崎廣業

小堀鞆音

竹内栖鳳

今尾景年

横山大觀

野村文擧

松本楓湖

佐久間鐵園

菱田春草

中澤岩太

森林太郎

二部

主任　松井直吉　黒田清輝
岩村透　松岡壽
岡田三郎助　和田英作
鹿子木孟郎　吉田博
中村不折　中澤弘光
山本森之助　小山正太郎
滿谷國四郎　松本亦太郎
森林太郎

三部

主任　中澤岩太　高村光雲
石川光明　白井保次郎
新海竹太郎　大熊氏廣
米原雲海　山崎朝雲

## 審査員元審査員出品

忠孝双全　東京　益頭峻南
四季山水　東京　佐久間鐵園、

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 四季花季 | 京都 | 谷口香嶠 | 秋景山水 | 東京 | 川端玉章 |
| 月下水禽圖 | 京都 | 今尾景年 | 役小角渡唐圖 | 東京 | 松本楓湖 |
| 威震秋江 | 東京 | 益頭峻南 | 孔雀 | 京都 | 菊池芳文 |
| 高千穗 | 東京 | 川端玉章 | 夏の一日 | 東京 | 寺崎廣業 |
| 寂寥 | 京都 | 山元春擧 | 蜀道七盤關眞景 | 東京 | 高島北海 |
| 長城の夕 | 東京 | 寺崎廣業 | 長江の朝 | 東京 | 寺崎廣業 |
| 雄圖 | 東京 | 小堀鞆音 | 魔障圖 | 茨城 | 下村觀山 |
| 歳寒三友 | 東京 | 荒木十畝 | 楚水の卷 | 東京 | 横山大觀 |
| 若竹 | 京都 | 菊池芳文 | 炊煙 | 東京 | 川合玉堂 |
| 黑き猫 | 東京 | 菱田春草 | | | |
| 肖像 | 東京 | 和田英作 | 溪流 | 東京 | 吉田博 |
| 温泉 | 東京 | 中澤弘光 | 島と松 | 東京 | 山本森之助 |
| 雲界 | 東京 | 吉田博 | くもり | 東京 | 岡田三郎助 |
| 五月雨 | 東京 | 山本森之助 | まとものあかり | 東京 | 和田英作 |
| 紀州勝浦 | 京都 | 鹿子木孟郎 | 二階 | 東京 | 滿谷國四郎 |
| 荒苑斜陽 | 東京 | 黑田清輝 | 薔薇 | 東京 | 和田英作 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 半諾迦尊者 | 東京 | 中村不折 | ひなた | 東京 | 岡田三郎助 |
| 林泉 | 京都 | 鹿子木孟郎 | 劍ヶ峰より | 東京 | 吉田博 |
| まひろ | 東京 | 中澤弘光 | 山中湖畔 | 東京 | 満谷國四郎 |
| いはや | 東京 | 山本森之助 | 雨前の山中湖 | 東京 | 満谷國四郎 |
| 默 | 東京 | 新海竹太郎 | 東奥の乙女 | 東京 | 山崎朝雲 |
| 仙丹 | 東京 | 米原雲海 | 和氏璧 | 東京 | 米原雲海 |
| 竹取翁 | 東京 | 米原雲海 | 斥候 | 東京 | 新海竹太郎 |
| 達磨 | 東京 | 山崎朝雲 | きんの棒 | 東京 | 新海竹太郎 |

## 第四回優賞品

### 日本畫

#### 二等賞

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 供燈 | 京都 | 菊池契月 | おとづれ | 東京 | 尾竹竹坡 |

#### 三等賞

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 女歌舞伎 | 東京 | 鏑木清方 | からくり | 京都 | 木島櫻谷 |
| 上苑賞秋 | 京都 | 上村松園 | 少將伊衡 | 東京 | 高橋廣湖 |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 秋のしらべ | 東京　榊原蕉園 | 孔雀王 | 茨城　木村武山 |
| 冬のまとゐ | | | |
| 初冬 | 東京　池上秀畝 | 山海圖 | 東京　小室翠雲 |
| 大佛炎上 | 京都　平井楳仙 | 夕月 | 京都　川村曼舟 |

## 褒状

| | | | |
|---|---|---|---|
| 逢坂山の逕 | 京都　上田萬秋 | 暮雪 | 京都　庄田鶴友 |
| 秋山曉靄 | 京都　田近竹邨 | 姿の關守 | 東京　島崎柳塢 |
| 夏山浴雨 | 東京　松林桂月 | 朝霧寒林 | 東京　田中頼璋 |
| 海と山 | 東京　島内松南 | 車争ひ | 東京　荒井寛方 |
| 深林 | 東京　小阪芝田 | 琵琶行 | 東京　橋本關雪 |
| 園の花 | 京都　三宅呉曉 | 秋の色 | 東京　平田松堂 |
| 渡船 | 東京　村岡應東 | 葵祭 | 東京　尾形月三 |
| 入江の朝 | 京都　德田隣齋 | 寂雨 | 京都　服部春陽 |
| 松林高士 | 京都　池田桂仙 | 大宮人 | 東京　山村耕花 |
| 四季の花 | 東京　中倉玉翠 | ながき日 | 京都　榊原紫峯 |
| あひるのかど | 京都　有井祥雲 | | |

## 西洋畫

### 二等賞

巖壁　東京　中川八郎

## 三等賞

讀書の後　東京　山下新太郎
九十九里　東京　青山熊治
柚　東京　小杉未醒
海邊の村　東京　中村彝
坐せる女　東京　南薰造
コック場　東京　平岡權八郎
茶屋　東京　八條彌吉
老人　東京　九里四郎
ネルのきもの　東京　渡邊與平
奈良　東京　矢崎千代治
湖畔　東京　眞山孝治

## 褒狀

窓邊の肖像　東京　田邊至
灯　東京　薄拙太郎
かげの人　京都　寺松國太郎
張り物　東京　坂本繁二郎
牧夫　東京　田中良
白薔薇　東京　鈴木錠吉
靜物　東京　仙波均平
靜けきゆふべ　東京　相田直彦
神の森　東京　吉田ふじを
黃菊白菊　東京　片多德郎
燈下　東京　夏目七策
朱胴　東京　柳敬助
疊　神奈川　大橋正堯
牧場　東京　池田永治
飼はれたる山羊　東京　辻永
風伯　東京　長原孝太郎

白粉の女　東京　長谷川昇

若松　東京　水野以文

彫刻

二等賞

墓守　東京　朝倉文夫

三等賞

女　東京　荻原守衛

褒状

髪洗　東京　藤井浩祐

化粧　東京　石川確治

湯あがり　東京　内藤伸

ボンヤリした馬　東京　池田勇八

埃　東京　建畠大夢

## 第五回審査員

主事　正木直彦

第一部　日本畫

主任　平山成信

川端玉章

今泉雄作

松本亦太郎

荒木寛畝

高島北海

寺崎廣業
小堀鞆音
竹内栖鳳
今尾景年
横山大觀
山元春擧
佐久間鐵園
菱田春草
紀叔雄

第二部 西洋畫

主任 森林太郎
松本亦太郎
岩村透
久米桂一郎
和田英作
吉田博



下村觀山
菊池芳文
谷口香嶠
川合玉堂
中川忠順
益頭峻南
望月金鳳
山岡米華

正木直彦
黒田清輝
松岡壽
岡田三郎助
鹿子木孟郎
中村不折

中澤弘光　山本森之助
小山正太郎　滿谷國四郎
中川八郎

第三部　彫刻

主任　塚本靖　高村光雲
石川光明　竹内久一
白井保次郎　新海竹太郎
大熊氏廣　米原雲海
山崎朝雲

## 審査員元審査員出品

細雨　東京　川合玉堂　水墨山水　東京　山岡米華
雨　京都　竹内栖鳳　子雀　京都　菊池芳文
羅浮　京都　谷口香嶠　避邪迎福圖　東京　佐久間鐵園
雨後山水　東京　川端玉章　山路　東京　横山大觀
墨牡丹　東京　益頭峻南　支那風景　東京　寺崎廣業

| | | |
|---|---|---|
| 朝 | 東京 | 吉田博 |
| 港の雨 | 東京 | 滿谷國四郎 |
| 草花 | 東京 | 和田英作 |
| 百日紅 | 東京 | 黑田清輝 |
| インスピレーション | 京都 | 鹿子木孟郎 |
| 奈良の晩春 | 東京 | 中澤弘光 |
| 造船場 | 東京 | 中川八郎 |
| 炭燒く烟 | 東京 | 山本森之助 |
| 嵯峨のほとり | 東京 | 中澤弘光 |
| 芥屋大門 | 東京 | 吉田博 |
| 夏草 | 東京 | 黑田清輝 |
| 高橋博士肖像 | 東京 | 黑田清輝 |
| 鐵槌 | 東京 | 新海竹太郎 |
| 一致 | 東京 | 新海竹太郎 |
| 滄溟 | 東京 | 山崎朝雲 |
| 觀音 | 東京 | 米原雲海 |



| | | |
|---|---|---|
| 高原の花 | 東京 | 中川八郎 |
| 春の山 | 東京 | 山本森之助 |
| 飯島博士の肖像 | 東京 | 滿谷國四郎 |
| 殘雪 | 東京 | 山本森之助 |
| 小金井博士肖像 | 東京 | 和田英作 |
| 浴場にて | 東京 | 岡田三郎助 |
| ポプラ | 東京 | 中川八郎 |
| 曇り日 | 東京 | 和田英作 |
| 白い色 | 東京 | 滿谷國四郎 |
| 暖爐の前 | 東京 | 中澤弘光 |
| 跋陀羅尊者 | 東京 | 中村不折 |
| 舞子の濱 | 京都 | 鹿子木孟郎 |
| 一休和尚 | 東京 | 新海竹太郎 |
| 林和靖 | 東京 | 山崎朝雲 |
| 天樂 | 東京 | 米原雲海 |
| 專念 | 東京 | 米原雲海 |

龍　東京　山崎朝雲　千仞の壑　東京　白井保次郎

# 第五回優賞品

## 日本畫

### 二等賞

若葉の山　京都　木島櫻谷　水　東京　尾竹竹坡

### 三等賞

日光山の四季　東京　山内多門　春景秋景山水　東京　小室翠雲

人眞似　東京　尾竹國觀　日照雨　大阪　北野恒富

秋山晩晴　東京　松林桂月　松の月　京都　都路華香

花ぐもり　東京　榊原紫峯

### 褒狀

溪山積翠　東京　小坂芝田　竹取　東京　前田靑邨

谷間　東京　池上秀畝　うたげの裝　東京　津端道彦

まきばの夕　京都　西村五雲　竹林の聽法　東京　荒井寛方

二月の頃　京都　村上華岳　佛敎東に來る　大阪　野山九浦

髮　京都　土田麥僊　休み　京都　大村廣陽

髮　東京　池田蕉園　　漁歌　京都　山下竹齋
伊勢物語　東京　島内松園　　山雲呑吐　京都　田近竹邨
朝顔と驛路の女　東京　鏑木清方　　あかつち山　京都　平井楳仙
萬竿煙雨　京都　山田介堂　　甌　京都　廣田百豐
護花鈴　東京　今村紫紅　　耶馬溪の朝　京都　庄田鶴友
噴火口　京都　川北霞峯　　高野山の夏　京都　川村曼舟
孤村の夕　東京　山田敬中　　片岡山のほとり　東京　橋本關雪
蛇皮線　京都　松村梅叟　　鷭　東京　結城素明
夾竹桃　京都　廣江霞舟　　菩提達磨　東京　吉川　準
重衡　東京　伊東紅雲　　南泉　東京　越塚友邦
兵燹　東京　小山榮達　　一休　東京　橋本正素
上加茂　京都　高橋春曉　　新承恩澤　東京　須佐天齋

西洋畫

二等賞

水郷　東京　山杉未醒　　金佛　東京　青山熊治
丸焼き　東京　南　薰造

三等賞

窓際　東京　山下新太郎　　女　東京　中村彝

海岸　東京　坂本繁二郎

### 褒状

或人の母　東京　片多徳郎　　サン、ミシエル橋畔　在佛國　石井栢亭

裁縫　東京　白瀧幾之助　　初秋　東京　三上知治

午後三時　大阪　赤松麟作　　果物　東京　松村巽

## 彫刻

### 三等賞

ながれ　東京　建畠大夢　　土人の顔(二)　東京　朝倉文夫

鏡の前　東京　藤井浩祐　　維摩一默　東京　平櫛田中

### 褒状

うさぎ馬　東京　池田勇八　　女郎花　東京　北村四海

壯者　東京　北村西望　　なんな　東京　新田藤太郎

もだえ　東京　國方天海　　荒川嶽　東京　石井鶴三

哀愁　東京　堀進二

# 第六回審査員

日本畫

主任　武井守正　山本梅莊
入江爲守　山元春擧
今泉雄作　松本亦太郎
今尾景年　益頭峻南
川合玉堂　寺崎廣業
横山大觀　荒木寛畝
谷森眞男　佐久間鐵園
高島北海　紀淑雄
小堀鞆音　菊地芳文
竹内栖鳳　下村觀山
塚本靖　平山成信
中川忠順　望月金鳳
山岡米華

西洋畫

主任　森林太郎　岡田三郎助
岩村透　和田英作

鹿子木孟郎
吉田博
中澤弘光
中川八郎
中村不折

久米桂一郎
黒田清輝
山本森之助
松岡壽
小山正太郎

## 彫刻

竹内久一
長沼守敬
山崎朝雲
白井雨山
新海竹太郎

高村光雲
大熊氏廣
石川光明
米原雲海

## 審査員元審査員出品

園の秋　東京　荒木十畝
夏景山水　愛知　山本梅莊
茂松清泉圖　東京　佐久間鐵園
積翠　東京　高島北海

葡萄　東京　荒木十畝
玄雲匝地　東京　益頭峻南
ダリヤ　東京　高島北海
水墨夏景山水　東京　山岡米華

| 作品 | 所在 | 作者 |
|---|---|---|
| 松上烏鷺圖 | 東京 | 望月金鳳 |
| 躍鯉圖 | 京都 | 今尾景年 |
| 瀟湘八景 | 東京 | 横山大觀 |
| 鴨東の妓 | 京都 | 鹿子木孟郎 |
| 若王寺の瀧 | 京都 | 鹿子木孟郎 |
| 木苺 | 東京 | 黒田清輝 |
| 飛驒の深山 | 東京 | 吉田博 |
| 奔湍 | 東京 | 吉田博 |
| 巨人の跡 | 東京 | 中村不折 |
| 波のあと | 東京 | 山本森之助 |
| 岸の丘 | 東京 | 中澤弘光 |
| 鼓 | 東京 | 中澤弘光 |
| 夏の朝 | 東京 | 中川八郎 |
| 石黒男爵の肖像 | 東京 | 和田英作 |
| 左丘明 | 東京 | 新海竹太郎 |
| 戰捷記念日 | 東京 | 新海竹太郎 |
| 便なき身 | 東京 | 白井雨山 |



| 作品 | 所在 | 作者 |
|---|---|---|
| 嵐峽 | 京都 | 山元春擧 |
| 潮 | 東京 | 川合玉堂 |
| 瀟湘八景 | 東京 | 寺崎廣業 |
| 某未亡人肖像 | 京都 | 鹿子木孟郎 |
| 習作 | 東京 | 黒田清輝 |
| 偶成 | 東京 | 岡田三郎助 |
| 寢覺の床 | 東京 | 吉田博 |
| 道 | 東京 | 中村不折 |
| 迦諾迦伐蹉尊者 | 東京 | 中村不折 |
| 砂濱 | 東京 | 山本森之助 |
| 乳の祈願 | 東京 | 中澤弘光 |
| 磯打つ波 | 東京 | 中川八郎 |
| 松上の日の出 | 東京 | 中川八郎 |
| 某夫人の肖像 | 東京 | 和田英作 |
| 婇女の熟睡 | 東京 | 新海竹太郎 |
| 虛心 | 東京 | 米原雲海 |
| 供養の乳 | 東京 | 山崎朝雲 |

山そだち　東京　山崎朝雲
竹生島　東京　山崎朝雲

## 第六回優賞品

### 日本畫　第一科

#### 二等賞

秋爽　東京　小坂芝田
火牛　東京　津端道彦

#### 三等賞

椿の秋　東京　池上秀畝
水郭の春　東京　田中頼璋
寒汀　東京　松林桂月
山王祭　東京　尾形月耕
四時佳興　東京　小室翠雲
夏景山水冬景山水　東京　佐竹永陵
藤房卿の草子　東京　高取稚成

#### 褒狀

赤壁夜遊圖　東京　井村貫一
群鹿　東京　望月青楓
層巒積雪　京都　秦金石
志摩大王崎　東京　田南岳璋
蘆鶴之圖　東京　近藤樵仙
深遠　京都　田近竹邨
竹溪細雨圖　京都　池田桂仙
尚齒會　愛知　森村宜稻
稻の濱　東京　芝景川
宴　東京　磯田長秋

溪山滴翠　大阪　水田竹圃　　船過孟瀆梯圖　京都　内海吉堂

松下煎茗　東京　橋本關雪

## 第二科

### 二等賞

寒月　京都　木島櫻谷　　夢殿　東京　安田靫彦

近江八景　東京　今村紫紅

### 三等賞

茄子　京都　菊池契月　　御輿振　神奈川　前田青邨

郡上十二景　東京　山内多門　　青田　京都　西山翠嶂

浦づたひ　京都　平井楳仙　　釣月和　京都　小村大雲

### 褒狀

木々の秋　東京　平田松堂　　天女の卷　東京　飛田周山

島の女　京都　土田麥僊　　白い雨　京都　廣江霞舟

甲ふたる馬　東京　結城素明　　挑戰　東京　伊東紅雲

にわかあめ　東京　尾竹竹坡　　ひともしごろ　東京　池田蕉園

白映　東京　石井天風　　勝鬨　東京　尾竹國觀

豐兆　京都　都路華香　　鷺　京都　松村梅叟

栗の秋　東京　村上鳳湖　　都の人　東京　池田輝方
くさむら　京都　山下馬山　　御室躑躅　京都　阿部春峯
諸　京都　原田西湖　　後醍醐帝　東京　橋本關雪
犧牲　東京　北上岐山　　極樂の井　東京　小林古徑
鵜船　京都　富田溪仙　　水牛　京都　大村廣陽
秋林　東京　保間素堂　　宗右衞門町の夕　大阪　島成園
幽溪起雲圖　京都　庄田鶴友　　枇杷　京都　柳原皆山
夏の雨　京都　藤井雪田　　鵜　東京　三枝素光
かすみ網　京都　加藤英舟　　ゆきぞら　京都　佐藤一星

### 西洋畫

#### 二等賞

豆の秋　東京　小杉未醒　　六月の日　東京　南薫造

#### 三等賞

化粧　東京　佐藤哲三郎　　無花果畑　東京　辻永
女四人　京都　池田治三郎

#### 褒状

落葉を拾ふ小兒等　東京　大野隆德　　荷蘭の子供　東京　石井栢亭

甲良ほし　京都　田邊至
花園にて　京都　安宅安五郎
屋後　愛知　加藤靜兒
鳳仙花　東京　香田曝太

彫刻

三等賞

「若き日」の影　東京　朝倉文夫
潭　東京　藤井浩祐
ねむり　東京　建畠大夢

## 第七回審査員

日本畫

主任　武井守正　入江爲守
今泉雄作　川合玉堂
横山大觀　谷森眞男
高島北海　竹内栖鳳
塚本靖　中川忠順
山岡米華　山元春擧
松本亦太郎　益頭峻南
小堀鞆音　寺崎廣業

荒木寛畝
木島櫻谷
菊地芳文
平山成信
森琴石
佐久間鐵園
紀淑雄
下村觀山
望月金鳳

西洋畫

主任　森林太郎
岡田三郎助
鹿子木孟郎
中川八郎
中澤弘光
黒田清輝
小山正太郎
岩村透
和田英作
吉田博
中村不折
久米桂一郎
松岡壽

彫刻

主任　高村光雲
米原雲海
長沼守敬
大熊氏廣
竹内久一
山崎朝雲

白井雨山　新海竹太郎

## 審査員元審査員出品

棕櫚と蘇鐵　東京　荒木十畝
溪山捕魚寒山歸樵　東京　佐久間鐵園
梅雨早秋　東京　高島北海
千紫萬紅　東京　寺崎廣業
雜木山　東京　川合玉堂
松並木　東京　横山大觀
聽雨　東京　山本森之助
女の顔　東京　岡田三郎助
神農　東京　中村不折
初秋の朝　東京　吉田博
酒田港　東京　吉田博
おだやかな朝　東京　中川八郎
海苔とる娵　東京　中澤弘光
足立軍醫監　東京　黑田清輝

萬壑松濤　東京　山岡米華
洞庭雪後　東京　益頭峻南
春夏秋冬　京都　山元春擧
夕月夜　東京　川合玉堂
驛路の春　京都　木島櫻谷
繪になる最初　京都　竹内栖鳳
汀つたひ　東京　山本森之助
凝視　東京　岡田三郎助
老孔二聖之會見　東京　中村不折
漁村の西日　東京　吉田博
夕風　東京　中川八郎
夕立前　東京　中川八郎
水に近く　東京　中澤弘光
菊花　東京　黑田清輝

加茂の競馬　京都　鹿子木孟郎
吉祥寺觀牡丹　東京　米原雲海

沙金　東京　米原雲海
價千金　東京　新海竹太郎

滿足　東京　新海竹太郎
嗚呼老矣　東京　新海竹太郎

觀音　東京　山崎朝雲
爾悠々　東京　山崎朝雲

面　東京　白井保次郎

# 第七回優賞品

## 日本畫　第一科

### 二等賞

幽邃　東京　小坂芝田
寒林幽居　東京　小室翠雲

### 三等賞

松林仙閣　東京　松林桂月
木曾山中殘雲　東京　田中頼璋

南淵魚水　東京　高取稚成
四時清娯　京都　池田桂仙

眞似　東京　津端道彦
猿　東京　望月青鳳

### 褒状

乍雨乍晴　京都　田邊竹邨
青山綠水　東京　佐竹永陵

積翠塔影　京都　山田介堂
畿甸八景　東京　田南岳璋

溪山鎚響　東京　田村豪湖　　管絃　東京　大坪正義
五月霽　東京　池上秀畝　　水と陸　東京　磯田長秋
湖山淸曉　大阪　矢野橋村

第二科

二等賞

鐵漿蜻蛉　京都　菊池契月　　遲日　兵庫　橋本關雪
相思樹下把金糸圖　東京　結城素明　　霜月頃　東京　堅山南風

三等賞

螢　京都　上村松園　　銀杏　京都　山田耕雲
讀の秋　東京　西村青歸　　驟雨　京都　山下竹齋
林の中から　東京　勝田勝琴　　放ち飼　京都　小林大雲
雨の後　東東　大智勝觀　　春　京都　星野空外
櫻雲　京都　玉舍春輝　　鵜　京都　山内信一

襃狀

柿　京都　田畑秋濤　　大衆勢　東京　小山榮達
熟果　東京　矢澤弦月　　炭焼き　京都　八田高容
秋興　京都　西村五雲　　六月の谷　東京　村上鳳湖

志摩の波切村　京都　小林霞村
祭りのよそほひ　大阪　島成園
篝　東京　渡邊萊渚
唐もろこし　京都　櫟文峰
溫室圖　京都　青山好孝
かろきつかれ　東京　鏑木清方
白粉の花　京都　松村梅叟
夕榮　京都　榊原紫峰
天草四郎　大阪　野田九浦
朝と夕　東京　長野草風
萩　京都　中津川涼風
住吉詣　東京　松岡映丘
夏雨　東京　濱谷白雨
祈禱　京都　西櫻洲

### 西洋畫

#### 二等賞

滯船　東京　石井柏亭
港の午後　東京　石川寅治
春さき　東京　南薰造

#### 三等賞

うつつ　東京　藤島武二
バチスとシチン　東京　五味清吉
カッフェの女　東京　太田三郎
櫛　京都　寺松國太郎
草刈　東京　矢崎千代二
ポプラーと夏蜜柑　京都　河合新藏
しぼり　東京　永地秀太

#### 褒狀

残雪　東京　長原孝太郎　　志摩の端　大阪　廣瀬勝平
おきな　大阪　赤松麟作　　曇り日　東京　田邊至
夕映の流　東京　齋藤豊作　　緑の蔭　東京　安宅安五郎

彫刻

二等賞

含羞　東京　朝倉文夫

三等賞

坑内の女　東京　藤井浩祐

褒状

神山詣り　東京　池田勇八　　木蓮　東京　石川確治
空想に耽り居る女　東京　北村四海　　某人の肖像　東京　畑正吉
寂靜　東京　吉田白嶺　　牛刀　東京　内藤伸

## 第八回審査員

日本畫

主任　武井守正　　今尾景年
川合玉堂　　高島北海

## 審査員元審査員出品

竹内栖鳳　山本梅莊
山元春擧　小堀鞆音
小室翠雲　寺崎廣業
佐久間鐵園　菊地芳文
平山成信　森琴石

### 西洋畫

主任　森林太郎　岡田三郎助
和田英作　中川八郎
中村不折　黒田清輝
松岡壽　藤島武二
滿谷國四郎

### 彫刻

主任　高村光雲　米原雲海
山崎朝雲　白井雨山
新海竹太郎

| 作品 | 地 | 作者 |
|---|---|---|
| 駒ヶ嶽 | 東京 | 川合玉堂 |
| 夕立前 | 東京 | 川合玉堂 |
| 水墨松林山水 | 愛知 | 山本梅莊 |
| 逍遙 | 東京 | 小室翠雲 |
| 高山淸秋 | 東京 | 寺崎廣業 |
| 小雨ふる吉野 | 京都 | 菊池芳文 |
| 赤い燐寸 | 東京 | 和田英作 |
| 水の流れ | 京都 | 鹿子木孟郎 |
| ばら | 東京 | 吉田博 |
| 杏花の村 | 東京 | 中川八郎 |
| 日本アルプス | 東京 | 中川八郎 |
| 女瀧 | 東京 | 中澤弘光 |
| ながれ | 東京 | 中澤弘光 |
| 其日のはて | 東京 | 黑田淸輝 |
| 岩山 | 京都 | 滿谷國四郎 |
| 旅人 | 東京 | 米原雲海 |
| 香川景樹肖像 | 東京 | 白井雨山 |

| 作品 | 地 | 作者 |
|---|---|---|
| 晩渡 | 東京 | 川合玉堂 |
| 魚介 | 東京 | 高島北海 |
| 楠正行救敵兵圖 | 東京 | 小堀鞆音 |
| 凉意 | 京都 | 木島櫻谷 |
| 雨後 | 東京 | 荒木十畝 |
| 黄昏 | 東京 | 和田英作 |
| 逍遙 | 京都 | 鹿子木孟郎 |
| 春 | 東京 | 吉田博 |
| 牛車 | 東京 | 吉田博 |
| 最上川 | 東東 | 中川八郎 |
| 卞和璞を抱て泣く | 東京 | 中村不折 |
| 灯 | 東京 | 中澤弘光 |
| もろろ日影 | 東京 | 黑田淸輝 |
| 淸潭 | 東京 | 山本森之助 |
| 砂丘の裏 | 京都 | 滿谷國四郎 |
| 櫂歌 | 東京 | 山崎朝雲 |
| すずし | 東京 | 白井雨山 |

全力　東京　新海竹太郎　　勤勉　東京　新海竹太郎

## 第八回優賞品

### 日本畫

#### 二等賞

ゆふべ　京都　菊地契月　　舞じたく　京都　上村松園
比叡山三題　京都　川村曼舟　　隅田川舟遊　東京　鏑木清方
閑雲野鶴　京都　都路華香　　南國　京都　橋本關雪

#### 三等賞

簡是劉家黑牡丹　東京　結城素明　　遼河の夏　京都　平井楳仙
秋聲　東京　松林桂月　　山高水遠　京都　池田桂仙
採桑　京都　西山翠嶂　　七面鳥　東京　平福百穗
憩ひ　京都　山村大雲　　溪間の秋　京都　川北霞峯
蓋簪　東京　田中賴璋　　兩國　東京　池田輝方
琉球の花　福岡　水上泰生　　小鳥の聲　東京　平田松堂

#### 褒状

春雲秋靄　京都　田邊竹邨　　中幕のあと　東京　池田蕉園

晴潭　東京　池上秀畝　　矢頃　東京　小山榮達
暮れ行く秋　京都　庄田鶴友　　筧　京都　石崎光瑤
散華　京都　土田麥僊　　初夏の日　東京　岡島徹郎
琉球所見　大阪　岡田雪窓　　畫室の花　京都　松村梅叟
紅蘭女史　東京　島崎柳塢　　秋聲　京都　秦金石
雨後　大阪　矢野橋村　　鴻　京都　山田耕雲
廣間へ・　東京　河崎蘭香　　樵　京都　林文塘
清溪漁隱　京都　山田介堂　　青東風　京都　五舍春輝
唐美人　東京　山田敬中　　鴨川の春　兵庫　高倉觀崖
雲林清深　大阪　水田竹圃　　梅妃楊貴妃　大阪　野田九浦
遮那王　東京　尾形月三　　山路の秋　京都　山下竹齋
うたたれ　京都　西櫻洲　　昔噺　東京　河合英忠
幼などち　東京　栗原玉葉　　立話し　京都　黒田芳沼

### 西洋畫

#### 二等賞

野村氏の像　東京　白瀧幾之助　　歸り路　京都　太田喜二郎

#### 三等賞

少女　東京　中村彝　　残雪　東京　長原孝太郎

初秋　東京　辻永

褒状

お茶とき　東京　安田稔　　曇り日　東京　小糸源太郎

滝　東京　吉村芳松　　夏山急雨　東京　片多徳郎

養鶏家　東京　高間純七　　淺草の眞晝　東京　小寺健吉

銅　東京　田中白　　午後の海　東京　山脇信德

酒倉　東京　尊宮一念

## 彫刻

### 二等賞

いづみ　東京　朝倉文夫

### 三等賞

トロをまつ坑夫　東京　藤井浩祐　　所感　東京　小倉右一郎

のぞき　東京　建畠大夢　　水の精　東京　北村四海

褒状

光に浴せる女　東京　堀進二　　あらより　東京　吉岡芳明

犠牲者　東京　戸張孤雀　　同盟罷工　東京　渡邊長男

秋　東京　池田勇八

## 第九回審査員

### 日本畫

主任　武井守正
川合玉堂
竹内栖鳳
山元春擧
小室翠雲
荒木十畝
平山成信
今泉雄作
高島北海
山本梅荘
小堀鞆音
寺崎廣業
菊地芳文

### 西洋畫

主任　森林太郎
和田英作
中村八郎
黒田清輝
滿谷國四郎
岡田三郎助
中村不折
藤島武二

彫刻

主任 高村光雲　米原雲海
山崎朝雲　白井雨山
新海竹太郎

## 審査員元審査員出品

| 出品 | 地 | 氏名 | 出品 | 地 | 氏名 |
|---|---|---|---|---|---|
| 峭壁摩天斷層夾波 | 東京 | 高海北海 | 駒ヶ獄秋粧 | 東京 | 小室翠雲 |
| 夏景山水 | 東京 | 小室翠雲 | うまや | 京都 | 木島櫻谷 |
| 夜聽歌者 | 東京 | 寺島廣業 | 信濃の山路 | 東京 | 寺崎廣業 |
| 四季花鳥 | 東京 | 荒木十畝 | 鶺鴒 | 京都 | 菊池芳文 |
| 黒き帯 | 東京 | 岡田三郎助 | 川邊 | 東京 | 岡田三郎助 |
| 五十島の雪 | 東京 | 岡田三郎助 | 佐用姫 | 東京 | 和田英作 |
| 書齋に於ける平瀬介翁 | 東京 | 鹿子木孟郎 | 札幌郊外 | 京都 | 鹿子木孟郎 |
| 札幌郊外 | 京都 | 鹿子木孟郎 | 穂高山 | 東京 | 吉田博 |
| 奔流 | 東京 | 吉田博 | 初秋 | 東京 | 吉田博 |
| 高山の夏三題 | 東京 | 中川八郎 | 高山の夏三題 | 東京 | 中川八郎 |
| 高山の夏三題 | 東京 | 中川八郎 | 補衲 | 東京 | 中村不折 |

長養　東京　中村不折
ゆく春　東京　中澤弘光
跡見刀自　東京　黒田清輝
凍れる小川　東京　山本森之助
匂ひ　東京　藤島武二
島　東京　滿谷國四郎
曠野　東京　米原雲海
みなかみ　東京　山崎朝雲
藥研　東京　山崎朝雲
新兵　東京　新海竹太郎

三つの思ひ　東京　中澤弘光
夏の人　東京　中澤弘光
戀船　東京　山本森之助
空　東京　藤島武二
魚市場　東京　滿谷國四郎
行水　東京　滿谷國四郎
松風　東京　米原雲海
獲物　東京　山崎朝雲
釋迦八相　東京　新海竹太郎
長袖　東京　新海竹太郎

## 第九回優賞品

### 日本畫

#### 二等賞

晴れ行く村雨　東京　鏑木清方
連峯映雪　京都　川村曼舟
秋晴　東京　池上秀畝

浦島　東京　菊池契月
四季の山　東京　田中賴璋
花がたみ　京都　上村松園

木挽町の今昔　東京　池田輝方
獵　京都　橋本關雪

## 三等賞

血路　東京　尾竹國觀
東へ　京都　小村大雲
豪華　東京　尾上竹坡
霜月十五日　東京　河崎蘭香
佐の江　東京　磯田長秋
御堂關白　東京　松岡映丘
農夫　京都　西山翠嶂
製作の前　東京　伊藤小波
光風霽月圖　京都　上田萬秋
四家文射　東京　高取稚成
太華山實景　大阪　水田竹圃

## 褒狀

雷鳴之陣　東京　小山榮達
三大門　東京　町田曲江

夏　京都　平井楳仙
大原女　京都　土田麥僊
樺太の夏　福岡　水上泰生
かへり路　東京　池田蕉園
立山　京都　川北霞峰
船出　東京　伊藤紅雲
松間の春秋　東京　平田松堂
水墨山水　東京　佐竹永陵
春梢生芽圖 雪後寒村圖　京都　池田桂仙
盛夏初冬　東京　山内多門
夢　東京　河合英忠
暖か　大阪　北野恒富
蕃薬の壺　東京　三井萬里

| 作品 | 府県 | 作者 |
| --- | --- | --- |
| 白馬銀鞍 | 東京 | 山田敬中 |
| 落雷 | 京都 | 一瀬孤螢 |
| 日午 | 京都 | 橋本虹影 |
| 祭の日 | 京都 | 松村梅叟 |
| 深山の秋 | 東京 | 五島耕畝 |
| 發願 | 大阪 | 野田九浦 |
| 稲荷山の新秋 | 京都 | 德田隣齋 |
| 深山の夏 | 東京 | 今中素友 |
| 豐樂 | 京都 | 玉舍春輝 |
| 寫經の圖 | 東京 | 棚田曉山 |
| つどひ | 大阪 | 金森觀陽 |
| 水死 | 東京 | 織田觀潮 |
| 出湯の宿 | 東京 | 戸室臨泉 |
| 山家の秋 | 東京 | 伊藤響浦 |
| 村のわらべ | 大阪 | 島御風 |
| みどりの雨 | 東京 | 南保秋淵 |
| 朝 | 京都 | 小林春樵 |
| 星合ひのそら | 東京 | 飛田周山 |
| 初夏 | 京都 | 大村廣陽 |
| 稽古のひま | 大阪 | 島成園 |
| 信樂の郷 | 京都 | 井口華秋 |
| 燒酒と南草 | 東京 | 三浦廣洋 |
| 葡萄 | 京都 | 山田耕雲 |
| 簞食壺漿迎王師 | 東京 | 島崎柳塢 |
| 華厳 | 京都 | 山元春汀 |
| 朝露 | 東京 | 平福百穗 |
| 文祿の威風 | 京都 | 岩田秀耕 |
| 幽溪積翠 | 東京 | 福田浩湖 |
| 雲邊淨刹 | 大阪 | 矢野橋村 |
| かの子屋の娘 | 東京 | 益田玉城 |
| 重衡 | 東京 | 槇戸觀海 |
| 寧樂の春 | 京都 | 黒田芳沼 |
| 閑汀圖 | 京都 | 庄田鶴友 |

## 西洋畫

### 二等賞

晩春　東京　長原孝太郎
葡萄棚　東京　南薰造
薪　京都　太田喜三郎
冬の小川　東京　三宅克巳
肖像　東京　中村彝

### 三等賞

麥はたき　東京　大野隆德
鏡の前　東京　森脇忠
入江　東京　柚木久太
紅葉の下湯　東京　牧野虎雄
磯菜摘　東京　小林萬吾
雲の影　東京　田邊至
落葉　東京　辻永

### 褒狀

春深し　東京　山下均
母と子の肖像　東京　熊岡美彦
眞菰のもと　東京　高間惣七
水の邊り　東京　小寺健吉
田舍道　東京　相馬其一
伐木の圖　東京　片多德郎
雨のあと　東京　小糸源太郎
背戸の初秋　東京　柳澤正直
近郊から　東京　池田永治
海岸の山　東京　多々羅義雄

## 彫刻

二等賞

怒濤　東京　北村西望

三等賞

イヴ　東京　北村四海　　夜の深み　東京　建畠大夢

春よ永劫なれ　東京　長谷川榮作　　行人　東京　山倉右一郎

髪　東京　北村正信

褒状

はなちる音　東京　石川確治　　若き女の胸像　東京　堀進二

みづゝかひ　東京　池田勇八　　早朝の禮拜　東京　藤井浩祐

わななき　東京　國方林三　　戀　東京　川上邦世

朝霞開宿霧　東京　後藤良

## 第十回審査員

委員長　武井守正　　主事　正木直彦

日本畫

平山成信　　竹内栖鳳

山本春擧　　菊池芳文

# 審査員及元審査員出品

寺崎廣業
高島北海
山本梅莊
小室翠雲
川合玉堂
小堀鞆音
今泉雄作
荒木十畝

## 西洋畫

森鷗外
和田英作
中村不折
中川八郎
和田三造
黒田清輝
岡田三郎助
滿谷國四郎
藤島武二
南薫造

## 彫刻

森鷗外
新海竹太郎
山崎朝雲
北村四海
高村光雲
白井保次郎
米原雲海
朝倉文夫

| | | |
|---|---|---|
| 清麗 | 東京 | 寺崎廣業 |
| 行く春 | 東京 | 川合玉堂 |
| 天空海濶 | 東京 | 小室翠雲 |
| 港頭の夕 | 京都 | 木島櫻谷 |
| 怒濤の月 | 東京 | 松本楓湖 |
| 天龍河 | 東京 | 吉田博 |
| ぼたん櫻 | 東京 | 山本森之助 |
| 稲荷堂 | 東京 | 山本森之助 |
| 春の日の神子 | 東京 | 中澤弘光 |
| あけちかし | 東京 | 和田英作 |
| たそがれ | 東京 | 中村不折 |
| 上高地の夏 | 東京 | 中川八郎 |
| 青島の夕 | 東京 | 中川八郎 |
| 響泉 | 東京 | 山崎朝雲 |
| M翁 | 東京 | 北村四海 |
| 龍樹 | 東京 | 新海竹太郎 |
| すみれ | 東京 | 北村四海 |
| 山二題 | 京都 | 山元春擧 |
| 富士の裾野 | 東京 | 高島北海 |
| 清妍 | 東京 | 荒木十畝 |
| 瑞雲 | 東京 | 松本楓湖 |
| 溪間 | 東京 | 吉田博 |
| 山頂花崗石 | 東京 | 吉田博 |
| 雨中梨花 | 東京 | 山本森之助 |
| 青き光 | 東京 | 中澤弘光 |
| 茶休 | 東京 | 黒田清輝 |
| 黎明 | 東京 | 中村不折 |
| 静 | 東京 | 藤島武二 |
| 春 | 東京 | 中川八郎 |
| 瓢箪総 | 東京 | 米原雲海 |
| 甲種合格 | 東京 | 新海竹太郎 |
| 水のほとり | 東京 | 北村四海 |
| 加藤先生の像 | 東京 | 朝倉文夫 |

# 無鑑査出品

| 作品 | 所在 | 作者 |
|---|---|---|
| 夕立 | 東京 | 池田輝方 |
| 竹生島 | 京都 | 川村曼舟 |
| 煉舟 | 京都 | 橋本關雪 |
| 花野 | 京都 | 菊池契月 |
| 夕月 | 東京 | 池上秀畝 |
| 山月四趣 | 東京 | 田中賴璋 |
| 初夏 | 東京 | 長原孝太郎 |
| 夏の朝 | 京都 | 太田喜二郎 |
| 裸體 | 東京 | 中村彝 |
| 夏景色 | 東京 | 三宅克巳 |
| 午後の日 | 東京 | 三宅克巳 |
| 石工 | 東京 | 北村西望 |
| 京十三景 | 京都 | 平井楳仙 |
| 寒山拾得 | 京都 | 橋本關雪 |
| 月蝕宵 | 京都 | 上村松園 |
| 華舫 | 京都 | 小室大雲 |
| 文姫辭胡 | 東京 | 池上秀畝 |
| 晴嵐 | 東京 | 長原孝太郎 |
| 桑摘 | 京都 | 太田喜二郎 |
| 山家 | 京都 | 太田喜二郎 |
| 田中館博士肖像 | 東京 | 中村彝 |
| 夏の山 | 東京 | 三宅克巳 |
| 晩鐘 | 東京 | 北村西望 |
| 栗 | 東京 | 北村西望 |

大正五年十月十七日印刷
大正五年十月廿一日發行

（定價金九拾錢）「送料八錢」

美術叢書第五編

（文展十年）

版權所有

著作者　青木小四郎

東京市神田區五軒町一番地
發行者　小林壽一

東京市芝區愛宕町三丁目二番地
印刷者　倉谷鎮夫

東京市神田區五軒町一番地
發行所　美術叢書刊行會
振替東京二三一六七番

賣捌所
東京神田區表神保町　東京堂
京都市上京區寺町通　芸艸堂
東京京橋區元數寄屋町　北隆館
大阪市東區平野町　柳屋書店
東京京橋區銀座三丁目　東海堂
大阪市東區淡路町　登美屋

東洋印刷株式會社印刷

# 美術叢書發行豫告

浮世繪の版畫　光悅と乾山　桃山時代の繪畫
浮世繪と美人　足利時代の繪畫　明治の美術
狩野派　浮世繪派　文泉と其流派
北齋と廣重　雪舟　渡邊崋山
蕪村　土佐派　現代の美術
支那の美術　日本の油繪　印度の美術
吳春と景文　圓山四條派

日本美術院再興記念
美術展覽會出品圖錄
定價金貳圓五拾錢
送料內地金拾七錢

日本美術院第二回
美術展覽會出品圖錄
定價金參圓
送料內地金貳拾壹錢

日本美術院第三回
美術展覽會出品圖錄
定價金參圓
送料內地金貳拾壹錢

分冊日本畫の部
定價金壹圓五拾錢

日本美術院編纂

# 大觀畫集

定價
上製金八圓
並製金六圓
送料金參拾錢

横山大觀畫伯の畫集は本書を以て嚆失とす

挿　畫＝文展院展出品畫を初めとして代表作六十餘枚

書册大＝竪一尺三寸横九寸の大册

裝　釘＝特製厚質良布紙表紙大和綴　上製絹表紙帙入